

京	都	府
<p>1・31 竹内栖鳳、報知新聞に「新帝展に対する意見」を発表。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>1・31 市立絵画専門学校長並びに3教授辞職(同校長兼教授西山翠嶂をはじめ同教授菊池契月・西村五雲・川村曼舟の4名が辞職。それと同時に堂本印象・福田平八郎・宇田荻郎・窠本一洋・中村大三郎・石崎光瑠の6名がいずれも教授に昇格、石川京都市助役が校長事務取扱となる)。 塔影 12:3、14:12</p> <p>2・上 京都画壇の帝展不出品運動起る(1月竹内栖鳳が発表「新帝展に対する意見」の影響で、栖鳳主宰の竹杖会を始め、西山・西村・土田・堂本・石崎・中村の各塾は塾員協議の結果いずれも不出品を決定)。 日本美術年鑑 昭12</p> <p>2・15 洋画家 河合新蔵没(慶応3・5・27大阪生、号無涯、享年70)。 同上</p> <p>2・25〜3・25 第1回改組帝展⁽¹⁾(橋本関雪「唐犬」、富田溪仙「万葉春秋」など出品。しかし、竹内栖鳳をはじめ京都はほとんど出品しなかった。この年は特選はなく、田之口青兎「小春の神泉」が推奨となる。4・3〜4・22 京都陳列会を京都美術館に開催)。 日本芸術院史</p> <p>3・11〜15 蒼潤社第1回美術工芸展、京都美術館に開催(同人作品のほか応募出品並びに賛助出品をあわせ177点陳列、同人作品とし岸本景春「刺繡二曲屏風春秋花鳥」・小合友之助「昼の月風呂先屏風」・皆川月華「猫染衝立」・清水正太郎「四友花瓶」・近藤悠三「薊絵花瓶」・浮田楽徳「釉彩花瓶」・米沢蘇峰「葡萄リス扁壺」など。応募作品307点中入選作は135点。蒼潤社賞：桶谷定一。工芸奨励賞：中村幸節・奥村究果・佐野多景夫)。 第1回同展出品目録、都市と芸術 256</p> <p>3・18〜29 京都博物館、幸野煤嶺遺作展を開催。 煤嶺遺墨、日本美術年鑑 昭12</p> <p>3・20〜24 白亜会第14回洋画展、京都美術館に開催(会員作品総数210点、招請者12名、作品数60点、特別陳列黒田重太郎作品20点、アンゼリコ作品複製67点)。 同展目録</p> <p>3・21〜29 街頭二科展、四条通りに開催。 日本美術年鑑 昭12</p> <p>3・24 川村曼舟、市立絵画専門学校および市立美術工芸学校長に決定(西山校長辞任後学生間に4教授留任運動等があり、西村五雲・川村曼舟両名が新校長就任方を希望され後者に決まる)。 塔影 12:4</p> <p>3・一 麗交会創立(東京および京都の工芸界の中堅作家19名が結成。事務所中京区富小路四条上ル龍文堂安之介方。会員は京都から伊東陶山・井田宣秋・龍文堂安之介・小川文斎・加藤宗蔵・楠部弥弼・浅見五郎助・道林俊正・平館魯)。 日本美術年鑑 昭14</p> <p>5・13〜19 第23回商工展。 第23回同展目録</p> <p>5・16 竹内栖鳳、平生文相に帝展改組に関する建白書を提出。 日本美術年鑑 昭12、18</p>	<p>5・23〜25 京都彫塑研究所、第1回彫塑展を京都美術館に開催(出品者は松田尚之を始め研究部員岡本庄三・鈴木清、客員矢野判三ら14名。出品点数41点)。 第1回同展目録</p> <p>5・24 京都在住の帝国美術院会員西山翠嶂・西村五雲・土田麦僊、帝展改組に関する意見書を連名で平生文相に提出、竹内栖鳳と同意見である旨を明らかにする。 日本美術年鑑 昭12</p> <p>5・28 京都美術館、新しくつぎの4名を同館評議員に囑託：西村五雲・太田喜二郎・川村曼舟・神阪雪佳。 美術館年報 昭11</p> <p>5・29〜6・2 第1回幽興会展、上野松坂屋ギャラリーに開催(同人古川北華・橋本関雪・津田青楓・正宗得三郎・牧野虎雄・銭瘦鉄ら)。 書画骨董雑誌 337</p> <p>5・29〜6・2 第7回京都工芸美術展、京都美術館に開催。 第7回同展目録</p> <p>5・31〜6・7 第1回爾歩美術協会展、京都美術館に開催(同会は帝展第2部関西会員をもって設立されたもの。会員：太田喜二郎・角野判治郎・吉田苞・小磯良平・赤松麟作・新井完。太田「島原の太夫」など)。 都市と芸術 262、爾歩美術協会展出品目録</p> <p>6・9 市立絵画専門学校、市立美術工芸学校の教員異動が発表される(山口華楊・松元道夫・上村松篁・三宅鳳白・池田遙邨ら絵専助教授となる。辻宇左雄・猪原大華・勝田哲・徳岡神泉・西村卓三・菊池隆志ら美工教員となる)。 塔影 12:7</p> <p>6・10 日本画家 土田麦僊没(明20・2新潟県生、名金二、享年50。東智積院に葬る)。 日本美術年鑑 昭12、麦僊遺作集、書画骨董雑誌 337</p> <p>6・11 富田溪仙・橋本関雪・菊池契月ら帝国美術院会員の辞表を提出。 日本芸術院史</p> <p>6・12〜17 第15回日本南画院展、京都美術館に開催(矢野橋村「聊爾集」・水田竹圃「雨趣」・白倉二峰「朝靄」・安田半圃「佐渡五景」・小室翠雲「三枝札」など南画作品49点を展示)。 美術館年報 昭11</p> <p>6・13〜15 第1回京都総合工芸研究会展、市美術館に開催(京都総合工芸研究会・市工業研究所の共催、中堅作家の総合展)。 日出 6・12</p> <p>6・13 陶芸家 2代真清水蔵六没(文久1・5・12京都生、名春太郎、享年76)。 京都工芸大観、日本美術年鑑 昭12</p> <p>6・20〜22 第1回工友園同人展、京都美術館に開催。 日本美術年鑑 昭12、都市と芸術 262</p> <p>6・20 京都工芸関係諸団体、6・4 提示された帝展開催方法その他の改革に関する平生文相案支持を決議し、約300名連署の上文相に建議。 日本美術年鑑 昭12</p> <p>6・20、21 菊池芳文筆和蘭ヘーグ平和宮壁張用綴錦原図を、京都美術館に展観。 美術館年報 昭11、同図解説</p>	

参	考	日	本
(1)第1回改組帝展(京都関係のみ)	審査員 竹内栖鳳、菊池契月、西山翠嶂、川村曼舟、西村五雲、土田麦僊、橋本関雪、富田溪仙、清水六兵衛 会員出品 橋本関雪「唐犬」、富田溪仙「万葉春秋」 選 奨 奥村霞城「漆器紫陽花手箱」、田之口青兎「小春の神泉」 政府買上げ 平館魯「漆器青融自映手宮」、河野秋邨「細雨」、林司馬「牡丹」 日本芸術院史	2・25〜3・25 改組第1回帝国美術院展、府美術館に開催(日本画・木彫・工芸)。大観「竜蚊躍四溟」、靱彦「役の優婆塞」、清方「慶喜恭順」、太田聴雨「星をみる女性」など。 3・一 オリンピック芸術競技に参加。 4・21 聖徳記念絵画館壁画完成式。 4・25〜5・14 第6回独立展(児島善三郎「瀬戸の風景」、福沢一郎「牛」、林武「裸婦」など滞欧作15点を特陳)。 6・10 日本画家 土田麦僊没(明20生、享年50)。 昭13・6 遺作展。 6・一 平生文相、帝院の再改組をはかる。 7・6 日本画家 富田溪仙没(明12生、享年58)。	7・25 新制作派協会結成(猪熊弦一郎、脇田和、小磯良平ら)。11・10〜11・17 第1回展を日本美術協会に開催(小磯「黒い帽子」、中西利雄「人物」、藤島「蕃女」・「朝陽」を特陳)。 9・11 大阪市立美術館開館。 10・16〜11・3 文展鑑査展、府美術館に開催、加藤栄三、朝井閑右衛門に文部大臣賞。 10・24 日本民芸館開館(館長柳宗悦)。 11・6〜23 文展招待展、府美術館に開催(栖鳳「夏鹿」、松園「序之舞」など)。 12・20 一水会結成(石井柏享、山下新太郎、安井曾太郎、畷伊之助ら)。
(2)文部省美術展(鑑査展)(京都関係のみ)	審査員 水田竹圃、矢野橋村、西村五雲、山口華楊、西山翠嶂、堂本印象、小野竹喬、窠本一洋、川村曼舟、福田平八郎、竹内栖鳳、中村大三郎、山鹿清草、清水六兵衛 選 奨 吉田勲示「働きに行く男」、番浦省吾「草花図彩漆衝立」、小合友之助「洛北山川の図屏風」、山本丘人「海の微風」、曲子光男「浜木綿の丘」、秋野不矩「砂上」 同上	7・25 新制作派協会結成(猪熊弦一郎、脇田和、小磯良平ら)。11・10〜11・17 第1回展を日本美術協会に開催(小磯「黒い帽子」、中西利雄「人物」、藤島「蕃女」・「朝陽」を特陳)。 9・11 大阪市立美術館開館。 10・16〜11・3 文展鑑査展、府美術館に開催、加藤栄三、朝井閑右衛門に文部大臣賞。 10・24 日本民芸館開館(館長柳宗悦)。 11・6〜23 文展招待展、府美術館に開催(栖鳳「夏鹿」、松園「序之舞」など)。 12・20 一水会結成(石井柏享、山下新太郎、安井曾太郎、畷伊之助ら)。	この年 ▷ 満谷国四郎没。 ▷ 赤塚自得没。
(3)文展(招待展)(京都関係のみ)	会員出品 西山翠嶂「竹生島」、川村曼舟「露水」、竹内栖鳳「夏鹿」 政府買上げ 上村松園「序の舞」、中村大三郎「読書」 同上	この年 ▷ 満谷国四郎没。 ▷ 赤塚自得没。	
(4)第15回日本自由画壇展覧会	林文塘「乍雨乍晴」・「町で拾った習作」・「お七」、西井敬岳「月の妙高山」、渡辺公観「石楠花」、玉舎春輝「木曾川」・「夕月」・「鹽竈」、上田萬秋「加茂川旧観」、広田百豊「松山雨後」、久保寛「隅田川」・「お軽3題」・「飛魚」、磯谷龍水「春暖」、岡本松峰「時雨」、岡本憲一郎「芍薬」、高田光琇「朝」、河村長観「娘図」、金沢成峰「椿」、武藤章「洛北霜晨」・「牡丹」、真継慎一「春寒」・「盛夏」、安島雨昂「佳日」、荒木祥石「鮎」、北村三千代「妹の像」、北村壽一郎「河口小景」。 日本自由壇展覧会図録		

京	都	府
6・26 近藤浩一路、日本美術院同人を脱退(また京都をはなれ東京に移住する)。 都市と芸術 262		開催(主催・日出新聞社。京都工芸家60余名の花器新作品120余点に、華道各流家元・宗匠らが花を活けて展観)。華工展目録
7・4 市学務課、市立絵画専門学校校長・教授として同校および市美術教育のためつくりきた竹内栖鳳・西山翠嶂・菊池契月・西村五雲の4名に、美術教育顧問を囑託、その名誉を表彰するとともに将来美術界の振興に尽力を求めるとともに。		10・一 河井寛次郎、富本憲吉・浜田庄司と共に柳宗悦の日本民芸館設立(東京・駒場)に力を尽す。毎日 10・21、民芸40年
7・6 日本画家 富田溪仙没(明12・12・9福岡県生。名鎮五郎 別号溪山人 享年58福岡善尊寺に葬る)。 日本美術年鑑 昭12、 書画骨董雑誌 338、塔影 12・7		11・6~23 文部省美術展(招待展) ⁽²⁾ (西山翠嶂「竹生鳥」・川村曼舟「露氷」・竹内栖鳳「夏鹿」など出品、上村松園「序の舞」・中村大三郎「読書」政府買上となる。12・2~15 京都陳列会を京都美術館に開催)。日本芸術院史
7・15 前田荻邨・松田尚之、市立美術工芸学校教諭となる。 双葉		11・18 水明会結成式挙行(日本画壇の革新をめざして京都における日本画家の中堅が団結して組織したもの。会員は森守明・上村松堂(翠嶂塾)、板倉星光・堀井香坡(契月塾)、山本倉丘(早苗塾)、池田遙邨・徳岡神泉(栖鳳塾)、三輪晁勢(印象塾)、山口華楊・前田荻邨(五雲塾)の10名および美術批評家下店静市(京都)大山光広(東京)ら)。塔影 12:12
7・28 土田麦僊の門下山南塾、塾解散決定を発表。 都市と芸術 昭11・8、塔影 12・8		11・29~12・5 丸物の新館落成を記念して、第1回洛秀会展を同店に開催(竹内栖鳳・橋本閑雪・西山翠嶂その他30名の作品を陳列)。 日本美術年鑑 昭12
8・21~23 京都市民芸同好会、第4回民芸品展を大丸に開催(出品総数157点。第1部欧州民芸第2部絵紺・第3部日本民芸)。第4回民芸品展目録		11・一 第1回新黨会展、大丸に開催(同会は大8橋本閑雪門下有志により組織されその後一時解散、昭10檜崎鉄香・榎崎朱雀・三津川光胖らの発起により橋本閑雪を指導者として再興される。事務所:左京区銀閣寺前、橋本閑雪方)。 日本美術年鑑 昭13
8・一 入江波光、市立絵画専門学校教授となる。 入江波光展目録、日本美術年鑑 昭22-26		12・12 京都貿易美術工芸協会発会式挙行。 経済時報 81
9・8 日本南画院解散(文展をめぐり院内の意見が二分され、統一的な絵画団体としての行動がとれなくなったため、京都の水田竹圃・人見少華・矢野橋村・矢野鉄山・河野秋邨・白倉二峰・水田硯山・稲村虹亭らが解散の導火となる。同院は創立以来16年の歴史を有する)。 日出 9・9、塔影 12:10		12・一 竹内栖鳳『栖鳳閑話』改造社より刊。 日本美術年鑑 昭18
9・19~23 第2回新日本洋画協会展 ⁽²⁾ 、京都美術館に開催(須田国太郎が賛助出品。また同会は19日新美術講演会を新島会館に開催。成瀬無極「絵画随想」・園頼三「絵画の描写力」・中井正一「現代に於ける絵画の位置」・須田国太郎)。 同展目録		この年 ▷ 菊池契月、帝国芸術院会員となる。 日本美術年鑑 昭31
9・下 藤田嗣治・東郷青児、新築された丸物の二階喫茶室、同食堂に各々キャンバス張付けの装飾壁画を描く。 日本美術年鑑 昭12		▷ 今尾景祥・久保田金襴、京都黒谷方丈再建に際し各々墨絵松図、彩色虎図(いずれも金地襖)を揮毫完成。 日本美術年鑑 昭12
9・一 堂本印象、昭5・12 揮毫を依頼された醍醐寺三寶院内純浄観の襖絵44枚を完成。同上		▷ 藤田嗣治、京都に5月開館の関西日仏会館の貴賓室にキャンバス張付け油絵壁画を揮毫。同上
10・13~11・3 昭和11年文部省美術展(鑑査展) ⁽²⁾ 。(京都が大半を占める。水田竹圃が審査主任。小野竹喬・山口華楊が審査員となる。曲子光男「浜木綿の丘」・秋野不矩「砂上」が選奨となる。11・14~27 京都陳列会を京都美術館に開催)。 日本美術院史		▷ 華歆美術協会創立(旧称爾歩美術協会、事務所:鳥丸道上立売上ル、太田喜二郎方。年1回公募展を開く)。 日本美術年鑑 昭16、
10・27~29 第1回白御会展、京都美術館に開催(同会は関西在住の院展系作家を主とする日本画の団体。事務所:左京区一乗寺松原町18、中島菜刀方。会員:石丸大象・今井桂三・館岡栗山人・中村貞以・中島菜刀・栗山弘演・藤田四郎・福井末義・小松均・越原義山・佐原修一郎・佐野光穂・三宅淳)。 都市と芸術 256、日本美術年鑑 昭12		▷ 田中佐一郎、東京へ移住。日出 9・28 ▷ 春、市立美術工芸学校漆工科廃止(美術工芸界の猛反対がおこり復活運動がおこる)。 日出 12:12
10・31~11・2 第1回華工展、京都美術館に		▷ 山口華楊、長岡女子美術学校教授となる。 山口華楊作品集 ▷ 春、日仏学館、東一条の地に新築完成(建築家オギュスト=ペレの高弟レモン=メストラレ)。 市美術館ニュース 28 ▷ 霜島正三郎、之彦と改名。 京都 昭41・4・18 ▷ 堀内正和、はじめて二科展に抽象彫刻を発表。 みづゑ 758

参	考	日	本
(5)第2回新日本洋画協会展出品			
今井憲一「噴水」・「風景」、井沢元一「織娘A(朝顔)」・「織娘B(金魚)」・「織娘C(百合花)」、池田治夫 未定、三水公平「極楽院」・「風景」、安田謙「裸婦A」・「裸婦B」・「二人」、松崎政雄「塑像隠蔽」・「肖像」・「海に立つ」、北脇昇「煙突のある風景」・「夾竹桃と女」・「静かなる港」、原田潤「赤衣」・「立像」、小栗美二「花」・「風景A」・「風景B」、牧田嘉一「花」・「鶏頭」、石田以波保「裸婦」、島津俊一「船荷」・「干船」・「海」、高橋竹三郎「裸婦」・「原作A」、小石原強「人」・「たこつば」・「岩」、田村一二「たこつば」・「たうもろこしA」・「たうもろこしB」、小牧源太郎「海A」・「海B」、山下嘉蔵「砂山」・「公園風景」・「高台寺風景」・「蓮山」、由利明「けし」・「女」・「凭れる女」、井上念「深緑の頃」・「風景」・「工事場風景」。賛助出品:須田国太郎「真昼の鳳凰堂」。 第2回新日本洋画協会展目録			

京	都	府
<p>1・7 辻宇佐雄、市立美術工芸学校教諭となる。(1・9 勝田哲、同校教諭となる)。 双葉</p> <p>1・24 京都工芸院創立(京都工芸界各部門の8団体、五条会・陶芸協会・綜工会・仲更会・京都漆芸会・金工作家連盟・蒼潤社・工友園が京都工芸の革新を宣言して大同団結した工芸の総括的研究団体。事務所：東山区五条坂5丁目。常任理事：山鹿清華・清水正太郎。理事：伊東翠壺・番浦省吾・堂本漆軒・岸本景春・皆川月華。幹事：井上彦之助・今大路長光・小合友之助・岡本庄三・奥村究果・米沢蘇峰・中村鷗生・佐野多景夫・江馬長閑・清水祥次・森野嘉光・水内平一郎・宮下善寿・鈴木貞次。2月上記8団体は解散)。 日本美術年鑑 昭12-14</p> <p>2・6、7 新穎会第1回展、京都の佐藤梅軒画廊の主催で同画廊に開催(同展は京都画壇各塾で毎月開かれる研究会での優秀作を集めて展示したもの。菊池契月・西山翠嶂・西村五雲・堂本印象・中村大三郎・石崎光瑠・水田竹圃・猪飼彌谷らの各画塾の他に早苗会・旧竹杖会員が参加。陳列数63点)。 日本美術年鑑 昭13、塔影 13・4</p> <p>3・17~21 第1回京都工芸院展、京都美術館に開催(出品300余点を鑑査の上197点陳列。作品は清水六兵衛「誰が袖硯箱」・清水正太郎「紫翠湧盛花器」・伊藤翠壺「彩填菱花文花瓶」・米沢蘇峰「彩捻文花瓶」・奥村霞城「鷺と鳥衝立」・堂本五三良「草虫隅屏風」・黒井光珉「極楽鳥紋二枚折」・番浦省吾「草花図手箱」・小合友之助「花と貝殻衝立」・皆川月華「描染繡温室之花社交服」・山鹿清華「手織錦草萌壁掛」など。受賞作品 知事賞：中村鷗生「手織錦二曲屏風」、市長賞：涌波蘇隆「オットセイ置物」、京都工芸院賞：奥村究果「乾漆鬮魚置物」、京都工芸院奨励賞：長谷川白峰「流湘花瓶」・板倉不朽土「玉椿手筈」・砂長伸「鉄と銀噴水文飾筥」・前田良三「手織つづれ錦額、丘」)。 日本美術年鑑 昭13、第1回同展出品目録、美術館年報 昭12</p> <p>3・19~21 京都市立染織試験場20周年記念染織展、同試験場に開催(同試験場の製作品をはじめ日本各地および外国工芸品の見本、手織と機械織の比較、流行の経過等を説明する参考資料などを展観)。 日本美術年鑑 昭13</p> <p>3・21~23 葱青社第1回展、大阪三笠屋に開催(竹内栖鳳門下生の池田遙邨、浜田観ら11人が組織する団体)。 塔影 13・5</p> <p>3・一 堂本印象、復興された高野山金剛峯寺根本大塔内に取り付けられる壁画真言八祖像を完成(昭11竜猛・竜智・善無畏・一行の4祖を描き、引続き金剛智・不空・恵果・弘法の4祖を製作、描きあげる)。 日本美術年鑑 昭13</p> <p>4・1~7 中村大三郎画塾第1回展、大阪松坂屋に開催(約40点出品)。 塔影 13・5</p> <p>4・13 京都高等工芸学校、陶磁器科を窯業科と改称。 京都高等工芸学校一覽</p>	<p>4・14~18 第7回独立美術協会展、京都美術館に開催(出品数117点、京都での同展は5年ぶり。同会は一般鑑賞者に独立美術理解の方法として解説日を設け、会員：里見勝蔵・須田国太郎・田中佐一郎が説明。19日から3日間、独立美術の会員のみ的小品約50点を朝日会館4階画廊に開催)。 都市と芸術 269、日本美術年鑑 昭13</p> <p>4・15~18 各人社第5回美術展、京都美術館に開催(出品総数57点、中村三郎遺作数点を陳列)。 都市と芸術 269</p> <p>4・28 竹内栖鳳(日本画)、文化勲章を受賞。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>4・29 印々泥社書道展覧会、京都美術館に開催。 美術館年報 昭12</p> <p>5・4 日本画家 中村春陽没(明24 京都生)。 日本美術年鑑 昭13</p> <p>5・6~11 第8回京都工芸美術協会展、京都美術館に開催。 第8回同展出品目録、日本美術年鑑 昭13</p> <p>5・14~16 東丘社春風会第1回作品展、大丸に開催(堂本塾東丘社内の新進が組織する会の第1回展。三輪晃勢「山」、曲子光男「春風」、戸島光雄「流れ」など)。 日本美術年鑑 昭13、塔影 13・6</p> <p>5・15~31 田能村直人遺作展、京都博物館に開催(田能村直人没後30周年を機として遺作および関係資料等140余点を展示。「梅花書屋図」・「嶺上看雲図」・「四季花卉図巻」など)。 日本美術年鑑 昭13</p> <p>5・15~22 富田溪仙遺作展、京都美術館の主催で同館に開催(出品点数124点、引き続き日本美術院主催で、東京上野の日本美術協会陳列館に開催)。 富田溪仙遺作展覧会目録、美術館年報 昭12</p> <p>5・16~22 第24回商工展京都陳列会、京都美術館に開催(出品数795点)。 第24回同展目録</p> <p>5・17~23 独逸国宝名作素描展、京都美術館に開催(同展は日独文化協会創立10周年に際し、独逸の国立美術館収蔵品中デューラーよりメンチェルに至る巨匠44名の素描画等95点を陳列)。 美術館年報 昭12</p> <p>5・29~6・17 第2回市展、京都美術館に開催(出品総数841点、日本画458点、洋画210点、彫刻26点、美術工芸147点)。 美術館年報 昭12、日本美術年鑑 昭13</p> <p>5・一 京都青年美術家クラブ創立(京都在住青年作家日本画68名、洋画36名、彫刻4名、工芸2名により組織される親睦団体。事務所：河原町御池上ル京友倶楽部内、幹事：樋口富麻呂・北脇昇・井上和雄ら。6・5 京都ホテル北館電気クラブに発会式を挙行)。 日本美術年鑑 昭13</p> <p>6・19~23 生爽会第1回絵画展、東京日本橋の三越に開催(西山翠嶂・西村五雲・堂本印象・中村大三郎・菊池契月の賛助の下に、各塾の新人</p>	

参	考	目	本
(1)第2回市展 受賞作品 第1部(日本画)18点 岩本周熙「店頭静物」、戸島光雄「流れ」、加藤美代三「溪流」、高木富三「はつ夏」、堤利彦「婦女三態」、濱田観「牡丹」、渡瀬凌雲「南紀佐野村」、川島浩「飛雪平日」、竹村白鳳「春酣」、窠本武雄「漁村の夕」、古川政司「亜熱帯風景」、會津勝己「五月」、澤宏毅「四月の高原」、廣田多津「おしろい」、近藤禎成「後庭」、麻田辨次「たにま」、神原始更「鶏頭」、樋口富鷹「朝鮮将棋」 第2部(洋画)12点 飯田清毅「網」、服部喜三「女」、小栗美二「設計図と女」、成瀬十郎「北野の森」、松村綾子「波と岩」、三水公平「静物」、岩崎又二郎「静物」、錦義一郎「花の庭」、高木四郎「夜の花」、山田ふじ子「城の見える風景」、正木順子「早春」 第8部(彫塑)3点 蘆田政一「十二年の習作」、柴田和彦「立てる女像」、吉田淑示「習作」 第4部(美術工芸)7点 伊東翠壺「象嵌蓮飾皿」、田中貞造「手織錦二曲屏風うちとの花」、長谷川白峰「緑晶釉散點文化瓶」、黒井光珉「黎明を告ぐる置物」、天野六郎助「華文時絵噴籠」、東端新作「キジの図衝立」、佐野多景夫「清雨の図染額」 本会委員出品 第1部(日本画) 石崎光瑠「牡丹」、橋本開雪「夏草」、中村大三郎「春」、小川翠村「朝露」、野添平米「仙崎港」、森守明「遅日」、福田翠光「萌芽」、八田高容「海老」、山下竹齋「渡し舟」、庄田鶴友「梅郷」、上村松篁「春」、三輪晃勢「高原に臥す」、保間素堂「新樹の蔭」、谷角日娑春「手鞠」、登内微笑「牽牛花」、池田遙邨「ポーズ」、宇田荻邨「芍薬」、阿部春峰「杜若」、神原苔山「菜果」、川上拙以「手袋」、水田竹圃「残雨」、東原方脛「軍鶏」、三木翠山「支那麗人」・「江南四題」、山本紅雲「緑光」、奥谷秋石「海邊雪中游鹿の図」 第2部(洋画) 伊谷賢蔵「卓上蔬菜」・「白衣婦人像」、川端彌之助「湖港」・「別府湾朝色」、坪井一男「花」、須田國太郎「村」、鹿子木孟郎「結城藏相」・「種差海岸」、澤部清五郎「牡丹」、霜島正三郎「牡丹」・「野菜」、都鳥英喜「春日」・「洛北早春」、伊庭傳治郎「窓際」・「風景」、國盛義篤「K子像」・「石榴」、黒田重太郎「芽出し頃の蘆の湖」・「籠の牡丹」、太田喜二郎「新緑の村(1)・(2)」・「田中善之助「南國の港」・「牡丹」、寺松國太郎「少女裸像」、森脇忠「顔」・「室内の女」、大橋孝吉「雨後の待仙亭」・「關門」 第3部(彫塑) 松田尚之「乾先生像」、矢野判三「腰かけたる女」・「立女」	<p>2・12 自由美術家協会結成(長谷川三郎、浜口陽三、村井正誠、山口薫ら)、7・10~19第1回展(村井「URBAIN」、長谷川三郎「蝶の軌跡」、植木茂「作品」)。 3・13~4・4 第7回独立展(児島善三郎「溪流」、須田国太郎「書齋」、北脇昇「独活」など)。 4・11~27 第12回国画展、東京府美術館に開催(梅原「霧島」、河野通勢「鹿鳴館時代娘」)。 4・28 第1回文化勲章授与式、芸術関係では佐々木信綱・幸田露伴・岡田三郎助・竹内栖鳳・横山大観・藤島武二。 6・11 海洋美術会結成。 6・24 帝国芸術院官制公布、会員に72人任命(日本画18、洋画13、彫刻9、工芸6、文芸16、音楽4、能楽2、建築2、書道2)。 9・1~25 青竜社第9回展、東京府美術館に開催(竜子「大陸策」4部作のうち「朝陽来」)。 9・3~10・4 第24回二科展(坂本「水より上る馬」、藤田「千人針」など)。 10・16~11・20 第1回新文展(松園「草紙洗小町」、契月「麦拒」など)。 11・26~12・10 一水会第1回展(安井「肖像深井英五氏像」・「承徳の喇嘛廟」、山下新太郎「姉妹」など)。 この年 ▷ 日本美術院々友12名で新興美術院をつくる。 ▷ 伊藤廉、里見ら独立を脱退、フォーヴィズム分裂のあらわれ。 ▷ 塚本靖没。 ▷ 光風会工芸部発足。 ▷ 洋画家 坂口右左衛門没(明24佐賀生)。</p>		

京	都	府
<p>井上和雄・西村卓三・西山英雄・曲子光男・奥村厚一ほか20余名が組織した会の第1回展。賛助出品、西山翠嶂「桃」・中村大三郎「羅衣」など。 日本美術年鑑 昭13、塔影 13: 9</p> <p>6・23 竹内栖鳳・菊池契月・西山翠嶂・清水六兵衛・川村曼舟・西村五雲・橋本閑雪ら帝國芸術院会員となる。 日本芸術院史</p> <p>6・24~29 海外超現実主義作品展、朝日会館に開催。 日本美術年鑑 昭13</p> <p>6・26~28 第1回東丘社三樹会絵画展覧会、京都美術館に開催（東丘社のうち七曜会・黒美会・三名会の新人の作品を陳列）。 塔影 13: 9、美術館年報 昭12</p> <p>6・30 猪原大華・登内微笑、市立美術工芸学校教諭となる（微笑は昭20・3・20 退職）。双葉</p> <p>6・一 京都地方の日本画女流作家、春泥社を組織（事務所：富小路三条南、福村方、会員：梶原緋紗子・三谷十糸子・小松華影・秋野不矩・広田たつ子・丹羽阿樹子・藤本園子・大日三世子・生田花朝・木谷千種。6・29~7・3 第1回展を京都丸物に開催）。塔影 13: 6、日本美術年鑑 昭13</p> <p>6・一 図案人連盟・図案家協会・美工図案院・農虹会4団体の代表者、京都図案連合協議会を設立（同会は市当局と交渉、昭15まで図案市展を4回開催）。 京友禅、図案年鑑 1</p> <p>6・一 上村松園、大5 皇太后陛下用命の雪月花三幅対極彩画を完成、上納する。 日本美術年鑑 昭13</p> <p>7・1~6 日本南画連盟第1回展、京都美術館に開催（出品数88点）。 美術館年報 昭12</p> <p>7・4 日本画家 西井敬岳没（明13 福井生）。 日本美術年鑑 昭13</p> <p>7・7~12 第1回竹立会展、大阪三越に開催（同会は竹内栖鳳門下同期生の研究団体。事務所右京区嵯峨神明町21、山本紅雲方。同人：徳岡神泉・山本紅雲・青木生沖・岩岡巢・中田晃陽・小森緑光）。23、24日 京都朝日会館に開催。 日本美術年鑑 昭13、塔影 13: 8、10</p> <p>8・15 京都嵯峨日本画家の研究団体嵯峨研究所、彩管報国として会員30余名が扇面に揮毫、嵯峨小学校に展覧会を開催し純益を軍事慰問資金として献納。 塔影 13: 9</p> <p>8・19 京都美術クラブ、朝日ビル内アラスカに発会式を挙行（京都在住の美術家、評論家の親睦団体。会員約80名。事務所：河原町三条、朝日新聞社京都支局内。理事：石崎光瑠・宇田萩郎・山口華楊・榎本一洋・森守明・黒田重太郎・須田国太郎・松田尚之・清水正太郎・皆川月華。幹事桜井義臣・佐久間義雄）。 日本美術年鑑 昭13、塔影 13: 9</p> <p>9・7 陶芸家 2代伊東陶山没（明4・5・12 滋賀県生）。 京都工芸大観、日本美術年鑑 昭13</p>		
<p>9・21~23 第3回新日本洋画協会展⁽³⁾、京都美術館に開催（特別陳列としてマチアス=グルエムスクルド作品複製数点。須田国太郎が賛助出品）。 同展目録</p> <p>10・1~3 六人展、大丸に開催（池田遙邇・徳岡神泉・金島桂華・勝田哲・榎本一洋・三宅鳳白らが出品）。 塔影 13:11</p> <p>10・6~11・20 第1回文展（竹内栖鳳「若き家鴨」、川村曼舟「秋空」、橋本閑雪「赴征」、西村五雲「麦秋」、菊池契月「麦拒」を出品。山口華楊「洋犬図」、上村松園「草紙洗小町」は政府買上となる。三谷十糸子「朝」は新人画として好評。11・28~12・12 京都陳列会を京都美術館に開催）。 日本芸術院史</p> <p>10・15~17 国防費献納自由画壇展、京都美術館に開催。 美術館年報 昭13</p> <p>10・16 漆工家 奥村霞城没（明26・1・23京都生）。 京都工芸大観、日本美術年鑑 昭13</p> <p>10・27~11・3 土田麦徳遺作展、京都美術館に開催（引き続き11・12~19 東京上野の美術協会列品館に開催）。 塔影 13: 2、9</p> <p>11・10~16 白亜会第15回洋画展、京都美術館に開催（作品総数300点、特別陳列として黒田重太郎作品20点、ドガ素描複製30点）。 同展目録</p> <p>11・18 西山翠嶂画塾青甲社、翠嶂はじめ塾員73名の作品を陸軍傷病兵慰問のため寄贈。 日本美術年鑑 昭13、塔影 13:12</p> <p>11・28~12・12 第1回文部省美術展覧会第1（1回文展）京都陳列会⁽²⁾（昭11春秋2回の官展が変則的な結末を示し、本年に入り更生第1回文展の開催により、ようやく融合統一の実をあげる。出品総数625点、日本画189点、洋画246点、彫塑65点、工芸125点）。 美術館年報 昭12、日本芸術院史</p> <p>11・一 日本新興南画院結成（京都および大阪の南画家20余名が組織したもの）。 日本美術年鑑 昭13</p> <p>11・一 中井正一、治安維持法違反で検挙される。京大講師の地位を失い、執筆も封じられる。 中井正一全集 2</p> <p>12・一 福田平八郎、病気のため市立絵画専門学校教授を辞任（その後をうけて、12・24 榎原紫峰同校教授となる）。 双葉</p>		
<p>この年</p> <p>▷ 河井寛次郎、パリ万国博で「鉄辰砂草花文壺」でグランプリを受賞。 京都 昭43・9・27</p> <p>▷ 陶芸家 宇野仁松没（元治1・10・11石川生）。 京都工芸大観、明治美術名作展目録</p> <p>▷ 北脇昇、第7回独立展に「独活」を出品。 日本の前衛絵画</p> <p>▷ 蒔絵家 神阪祐吉没（明19生）。 京都の美術工芸100年展目録</p>		

参	考	参	考																																													
<p>第4部（美術工芸）</p> <p>山鹿清華「手織錦畫長図屏風」、山田楽全「水邊の草花乾漆香爐及盆」、大西浄長「富士釜」、楽吉左衛門「暮葉黒花盃」・「赤茶盃」、清風与平「磁製彩色菊ノ図皿」、清水六兵衛「飛瀨香爐」、岸本景春「刺繡晴雨風雪二曲屏風」、平館齋「春風落日銘々盆」、河合卯之助「牡丹蔓肉合彫白瓷花瓶」、諏訪蘇山「青雲龍文香爐」、河村蜻山「染付花鳥文盛花器」、伊東信助「青華篋絵花瓶」、皆川月華「描染繡壁掛双鶏乱舞」、小合友之助「牡丹」、戸島光孚「群鯉漆額」、伊東陶山「黃地唐華文花瓶」、平野吉兵衛「銅髹式華器」、奥村霞城「栗之図手箱」、楠部彌次「黄磁華文花瓶」、三木表悦「夕顔食籠」、清水正太郎「紫翠湖花瓶」・「金網狩獵文壺」、江馬長閑「落葉蒔絵硯箱」、平野吉兵衛「饗養文壺式銅餅」、江馬長閑「葡萄文花器」、澤田宗山「七宝透花瓶」、番浦省吾「研彩図四曲屏風」、神阪雪佳「漆絵絡絲」、宮永東山「青瓷耳付天平模様大花瓶」、諏訪蘇山「黄瓷尊式花瓶」 市美術館年報 昭12</p> <p>(2)第1回文展（京都関係のみ）</p> <p>審査員 菊池契月・西村五雲・西山翠嶂・宇田萩郎・堂本印象・福田平八郎・矢野橋村・山鹿清華・沼田一雅・河村蜻山</p> <p>会員出品 竹内栖鳳「若き家鴨」、川村曼舟「秋空」、西村五雲「麦秋」、菊池契月「麦拒」、橋本閑雪「赴征」</p> <p>審査員出品 堂本印象「観世音」、宇田萩郎「田植」、沼田一雅「胡砂の旅」、山鹿清華「手織錦熱河図壁掛」</p> <p>特選受賞者 絵画 不二木阿古「将棋親旧」</p> <p>彫塑 吉田勲示「弓」</p> <p>美術工芸 河村喜太郎「金襴手雲模様」・「八角捻水指」 日本芸術院史</p>		<p>(3)第3回新日本洋画協会展出品 今井憲一「秋」・「翅と静物」・「昼」・「静物」、安田謙「ヴィナスの誕生A」・「ヴィナスの誕生B」・「習作」、島津冬樹(俊一)「或る日」・「海底」・「漁村の園」、原田潤「蓮」、杉山昌文「不幸」・「静止せる風景」・「静物」、服部勲「朝顔」・「ダリヤ」、小栗美二「海辺裸像」・「岩と少年」・「少女達」、吉加江清(未定)・(未定)、井上稔(未定)・(未定)、松崎政雄「力士孤独」・「力士」、田村一二「夜」・「街」・「屈折」、北脇昇「空の決別」・「空港」・「探検飛行」、小牧源太郎「生の解釈学(生のタブー)」(2点)、小石原勉「肖像A」・「肖像B」、久保田明之「豆」・「網綱」・「夕陽」、高橋竹三郎「海辺裸婦」・「鯉」、小林勇「失はれつつあり」・「失はれし時」、小林貞次郎「青衣の女」、神野七五三吉「縛られたシャボテン」・「珊瑚」 賛助出品：須田国太郎「習作」</p> <p>集団制作（浦島物語）設計書</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>担当作家</th> <th>担当命題</th> <th>参考的 解 義</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>吉加江 清</td> <td>浦島亀を救ふ</td> <td>憧憬</td> </tr> <tr> <td>小石原 勉</td> <td>亀の迎へ</td> <td>誘惑</td> </tr> <tr> <td>北脇 昇</td> <td>海上へ</td> <td>好奇</td> </tr> <tr> <td>原田 潤</td> <td>海底を</td> <td>愛慕</td> </tr> <tr> <td>安田 謙</td> <td>竜宮見ゆ</td> <td>歓喜</td> </tr> <tr> <td>今井 憲一</td> <td>竜宮に着く</td> <td>讚嘆</td> </tr> <tr> <td>松崎 政雄</td> <td>乙姫に会ふ</td> <td>恋着</td> </tr> <tr> <td>井上 稔</td> <td>竜宮の生活A</td> <td>親和</td> </tr> <tr> <td>田村 一二</td> <td>” B</td> <td>惑溺</td> </tr> <tr> <td>三井 迂平</td> <td>” C</td> <td>虚無</td> </tr> <tr> <td>小栗 美二</td> <td>” D</td> <td>厭飽</td> </tr> <tr> <td>小牧源太郎</td> <td>郷愁を訴ふ</td> <td>倦怠</td> </tr> <tr> <td>杉山 昌文</td> <td>玉手宮に誓ふ</td> <td>執着</td> </tr> <tr> <td>島津 俊一</td> <td>玉手宮は遂に開かれた</td> <td>批判的現実</td> </tr> </tbody> </table> <p>背景的部分の色系（次第に量を減ず） 桃色 } 主 題 的 モ チ ーフ の 色 系 （ 次 第 に 量 を 増 す ） 朱色 } 紅色 } 青色 } 白色 }</p> <p>第3回新日本洋画協会展目録</p>		担当作家	担当命題	参考的 解 義	吉加江 清	浦島亀を救ふ	憧憬	小石原 勉	亀の迎へ	誘惑	北脇 昇	海上へ	好奇	原田 潤	海底を	愛慕	安田 謙	竜宮見ゆ	歓喜	今井 憲一	竜宮に着く	讚嘆	松崎 政雄	乙姫に会ふ	恋着	井上 稔	竜宮の生活A	親和	田村 一二	” B	惑溺	三井 迂平	” C	虚無	小栗 美二	” D	厭飽	小牧源太郎	郷愁を訴ふ	倦怠	杉山 昌文	玉手宮に誓ふ	執着	島津 俊一	玉手宮は遂に開かれた	批判的現実
担当作家	担当命題	参考的 解 義																																														
吉加江 清	浦島亀を救ふ	憧憬																																														
小石原 勉	亀の迎へ	誘惑																																														
北脇 昇	海上へ	好奇																																														
原田 潤	海底を	愛慕																																														
安田 謙	竜宮見ゆ	歓喜																																														
今井 憲一	竜宮に着く	讚嘆																																														
松崎 政雄	乙姫に会ふ	恋着																																														
井上 稔	竜宮の生活A	親和																																														
田村 一二	” B	惑溺																																														
三井 迂平	” C	虚無																																														
小栗 美二	” D	厭飽																																														
小牧源太郎	郷愁を訴ふ	倦怠																																														
杉山 昌文	玉手宮に誓ふ	執着																																														
島津 俊一	玉手宮は遂に開かれた	批判的現実																																														

京	都	府
<p>1・12 徳田隣斎、「尚武の神」として有名な中部峰山町の府社金比羅神社に、戦勝を記念して大絵「蒼海昇旭」を奉納。 塔影 14:2</p> <p>1・13 日本自由画壇、林文塘除名の声明を発表。 同上</p> <p>1・15～17 第1回八煌社展、朝日会館画廊に開催（八煌社は京都絵専の卒業生および在校生の新人14名が組織する団体、国民精神総動員の叫ばれるおりから、日本精神文化高揚のため、日本画の芸術性を八絃に煌かせる使命を担うというのがその創立主旨）。 都市と芸術 昭13・2、塔影 14:2</p> <p>1・20 京都美術館評議委員会、同館事務所で開催され、京都市美術展を年中行事に決定。 美術館年報 昭13</p> <p>2・5 建築家・工学博士 武田五一没（明5・11・15 広島県生。享年67）。 日本美術年鑑 昭14</p> <p>2・8～13 早苗会、大阪大丸に開催、(月並研究会の優秀作に会員の特別製作を加えた50余点を展覧)。 塔影 14:2</p> <p>2・9～17 従軍画家小早川秋声戦線スケッチ蒐集品展、丸物に開催。 日本美術年鑑 昭14</p> <p>2・20 日本画家 小村大雲没（明16島根県生、名権三郎、享年56）。 日本美術年鑑 昭14、塔影 14:3</p> <p>3・1～5 東京と京都の日本画家10名、井南居宮崎政近のあっ施で井井会を結成、第1回展を芝の東京美術倶楽部に開催（会員は東京から広島晃甫・壺山南風・奥村土牛・田中咄哉州・木村棲雲、京都から小野竹喬・宇田荻邨・金島桂華・山口華楊・徳岡神泉の5名ずつ）。 塔影 14:2</p> <p>3・1 小川翠村、大阪四天王寺内貫主(管長)の居室2室の襖絵16枚と上下両戸棚8枚を完成、その納画式が挙行される。 塔影 14:3</p> <p>3・4～6 第1回早春社展、大丸に開催（川村曼舟主宰の早苗会内の新人が組織する会の第1回展）。 日本美術年鑑 昭14</p> <p>3・9～14 春虹社第4回日本画展、東京日本橋の三越に開催（出品作品は上村松園「うつらう春」・菊池契月「斜陽」・金島桂華「暮春」・榊原紫峰「鳥骨鶏」・福田平八郎「大根」など17点、3・23～27 同展を大阪三越に開催）。 同上</p> <p>3・18～20 第2回京都工芸院展、京都美術館に開催（出品総数165点。受賞作品は知事賞：叶松谷「黛変羽紋花瓶」（陶）、市長賞：平石孝「あざみの図手箱」（漆）、工芸院賞：佐野多景夫「風呂先屏風沼」（染）、工芸奨励賞受賞者：岩村貞夫・奥村究果・田中貞造・田中保・辻晋六・前田良三・砂長伸）。 日本美術年鑑 昭14、第2回展同出品目録</p> <p>3・19～27 中村大三郎画塾試作展、大阪松阪屋に開催。 日本美術年鑑 昭14</p> <p>3・25～27 第1回葱青社展、京都美術館に開催（同人11名が数点ずつ出品、池田遙邨「もみじの高尾」・紫原希祥「実る山村」・川本参江「石</p>	<p>佛」など、同人の連作「京洛春秋」も出品される。昨春の大阪における試作展について、今回あらためて日展として開催）。 日本美術年鑑 昭14</p> <p>3・25～31 第1回東方美術協会展、朝日会館に開催（同協会は昭9日本画家・工芸家がレアリスムを唱導して組織する。事務所：上賀茂南大路町・井上永悠方、会員：井上永悠・品角黎晃・大西政治・木下靈山・糸井永晃）。 同上</p> <p>3・26～28 第11回青甲社展、京都美術館に開催（西山翠嶂「雨余」・堂本印象「女子出定」・山内信一「囀り」・川上拙以「蓬庵」・小川翠村「ゼネラルとナミトミ」・上村松篁「羊と遊ぶ」・森守明「湖畔凍風」・福田恵一「幼時の信長」・福田翠光「三日図」・三谷十糸子「夏」など、6・1～5 大阪三越でも開催）。 西山画塾青甲社、日本美術年鑑 昭14</p> <p>3・27 鹿子木孟郎、彩管報国のため上海に出発。 都市と芸術 277</p> <p>3・31 西陣織物同業組合解散、西陣織物工業組合が引きつく。 西陣織物館記</p> <p>4・1～3 第2回白御会展、京都美術館に開催。 日本美術年鑑 昭14</p> <p>4・1～3 第11回菁莪会展、京都美術館に開催（出品数47点、水田竹圃「寒堤」・水田硯山「石溪新緑」・湯川三舟「海風」・片桐白登「八甲田の初夏」・末藤米圃「沢国早春」・立松玉泉「朝霧」など）。 同上</p> <p>4・8～10 中村大三郎画塾展、京都美術館に開催（同展は3月の試作展につぐ第2回の塾展。中村大三郎の賛助出品「弱法師」を展示）。 同上</p> <p>5・1～20 第3回市展、京都美術館に開催（搬入数1193点中入選数526点、無鑑査出品90点、あわせて616点を陣列。受賞者は日本画5名、洋画10名、彫塑3名、美術工芸8名計26名。 同上</p> <p>5・6 府学務部、国民精神総動員の一助として、明治天皇聖徳記念絵画館壁画を光画（写真）として展覧に供することを発表（会場 5・17～19 福知山公会堂。5・24～26 京都美術館）。 3学1088号</p> <p>5・7～11 京都美術倶楽部30周年記念展、同倶楽部会場に開催。 都市と芸術 昭13・6、塔影 14:5</p> <p>5・12～14 富岡鉄斎遺作展、日本国粹画保存会主催の下に東京日本橋の白木屋に開催（鉄斎の遺作30余点を展示）。 塔影 14:5</p> <p>5・21～23 松田彫塑研究所落成記念展、同所（京都）に開催。 日本美術年鑑 昭14</p> <p>5・22～26 土田麦僊遺作展、京都美術館に開催（同展は麦僊の代表作を網らしたもので99点を展示。顧問：細川護立・竹内栖鳳・大原総三郎、発起人：入江波光・西山翠嶂・西村五雲ら。他に旧国画創作協会の同志および竹杖会同門の有志等が同展に協力）。 美術館年報 昭13、麦僊遺作集</p>	

参	考	日	本
(1)第3回市展	<p>受賞作品</p> <p>第1部（日本画）5点 奥村厚一「春晝」、倉津勝己「春」、秋野不矩「兄弟」、菊池隆志「仕度」、平間且陵「白夜」</p> <p>第2部（洋画）10点 飯田清毅「犬吠岬」、今井憲一「残花」、伴庄兵衛「口紅」、錦義一郎「裸女」、吉田達磨「枯蓮池」、山本正雄「丹波舊道」、松村綾子「梅咲く小豆島」、福井勇「石榴」、北脇昇「眠られぬ夜のために」、島津冬樹「龍安寺石庭」</p> <p>第3部（彫塑）3点 岡本庄三「女」、峯孝「N君の裸像」、柴田和彦「腰をかけたる女」</p> <p>第4部（美術工芸）8点 八田泰造「染色キリン四曲屏風」、岡村土佐生「刺繍額文鳥」、奥村究果「サボテン飾棚」、新開邦太郎「金襴手花瓶」、中後茂守「黒耀釉花瓶」、村田春緑「布ニ依ラザル刺繍額モリカゴ」、山田豊「山躑躅手管」、森野嘉光「紫繡磁鉢」</p> <p>本会委員出品</p> <p>第1部（日本画） 猪飼嘯谷「五朝奉仕の宿禰」、西村五雲「園裡即興」、堀井香坡「春雨」、堂本印象「細雨薫煙」、小川翠村「草庭」、川村曼舟「白雲無盡」、勝田哲「少女」、武田鼓葉「牡丹」、上田萬秋「礎なれ松」、八田高容「うらら」、西山翠嶂「牡丹」、徳田隣斎「雨峽」、大村廣陽「春光」、小野竹喬「雪後」、川北霞峰「常夏の國」、谷角日姿春「琴」、中村大三郎「黒き帽子」、上村松篁「兎」、宇田荻邨「青麦」、山口華楊「雞」、前田荻邨「タイドプール（潮溜)、不動立山「山科街道」、福田翠光「哺養四題」、榊原吾山「筍」、水田竹圃「松籟」、三宅風白「竹生島」、東原方僊「鷺」、野添平米「湖邊春望」、山下竹齊「遅日」、栗本一洋「夕至」、福田恵一「矢並」、小林柯白「花昌蒔」、菊池契月「清水」、水田硯山「林苑花晨」、白倉二峰「西湖図」</p> <p>第2部（洋画） 伊藤快彦「絵島」、都鳥英喜「湖東春日」、大田喜二郎「春の水郷」、鹿子木孟郎「緑陰」、坪井一男「ハーブ」、國盛義篤「少女の顔」・「山陰の村」、澤部清五郎「春苑」・「晩春」、森脇忠「肖像」・「舞妓」、伊谷賢蔵「蠶嚶粟」・「春の伯耆大山」、大橋孝吉「三ツ瀧」・「信楽壺と椿」、川端彌之助「怒濤」・「七尾線」、田中善之助「南支の港」、黒田重太郎「雪後」、寺松國太郎「たきのほとり」・「假睡」、霜鳥之彦「魚介蔬菜」、須田國太郎「筆石村」</p> <p>第3部（彫塑） 矢野判三「陽春」・「浴女」、松田尚之「春の作」・「久野博士像」</p> <p>第4部（美術工芸） 伊東信助「玉欄の図花瓶」・「いづ倉人形置物」、</p>	<p>2・11 新美術人協会結成（吉岡堅二、福田豊四郎らの新日本画研究会の発展）。</p> <p>3・2 日本画家 松岡映丘没（明14生、享年58）。昭15・7・9～16 遺作展。</p> <p>3・13～4・3 第8回独立展（児島善三郎「箱根」、中山巍「王道楽土」、清水登之「擬装」、巖光「風景」など）。</p> <p>4・9～24 第13回国画展（梅原「竹窓裸婦」・「城山」など）。</p> <p>4・12 日本画院結成（望月春江ら）。</p> <p>6・27 大日本陸軍従軍画家協会結成。</p> <p>7・一 商工省、流行防止の通達。</p> <p>9・3～10・4 第25回院展（青邨「大同石仏」、小倉遊亀「浴女」など）。</p> <p>9・3～10・4 第25回二科展（坂本繁二郎「松間馬」、向井潤吉「突撃」、北川民次「戦後図メキシコ」など）。</p> <p>10・16～11・20 第2回文展（靱彦「孫子勤姫兵」、松園「砧」、藤島「耕到天」、梅原「裸婦扇」、藤井浩祐「鐘」など）。</p> <p>10・一 第1回創紀美術展、銀座青樹社画廊に開催。</p> <p>12・3 九室会結成（二科会の吉原治良、山口長男ら）。昭14・5 第1回展。</p> <p>12・17 日本画家 小川芋銭没（慶応4生、享年71）。</p>	<p>この年ごろ</p> <p>▷ 多くの作家が従軍しはじめ、従軍画家協会展が開かれ、戦争画氾濫しだす、前衛絵画の運動は退き、日本主義・復古主義が強まる。</p> <p>▷ 淡交会創立（小堀鞆音・下村観山・山元春挙・竹内栖鳳・川合玉堂・横山大観らによる）。</p>

京	都	府
<p>5・24～26 聖徳景仰展、京都美術館に開催（文部省・府・市主催・明治神宮外苑聖徳記念絵画館の絵画硝子写真を展覧する。陳列品点数80点）。美術館年報 昭13</p>		
<p>5・31 京都美術団体代表者協議会、京都美術館に開催〔彩管報国的一端として、美術品を陸海軍病院に寄贈し、傷痍軍人を慰問すべく、傷痍軍人慰問美術家連盟を結成、出席者：文部省役人、16師団大佐ら、府・市役人、絵専の川村校長、画壇からは菊池契月（同塾）金島桂華（竹杖会）・中村大三郎（中村塾）・堂本印象（東丘社）・案本一洋（早苗会）・竹村白鳳（石崎塾）・白倉二峰（南画連盟）・上村松篁（青甲社）・猪飼嘯谷（青竹会）・衛藤晴村（青竹会）・榎崎朱雀（橋本塾）・広田百豊（自由画壇）・鹿子木孟郎（鹿子木塾）・太田喜二郎（紫野研究所）・黒田重太郎（二科会）・田中善之助（春陽会）・大橋孝吉（国画会）・須田国太郎（独立美術協会）〕。大阪毎日 6・1</p>		
<p>6・1～2 昭和工芸協会創立10周年記念展、京都美術館に開催。日本美術年鑑 昭14</p>		
<p>6・3～5 山元春挙追悼早苗会展、京都美術館に開催（川村曼舟を会長とし、山元春挙の遺業を継承するため同会が組織される）。塔影 14: 4、日本美術年鑑 昭14</p>		
<p>6・4～6 第1回東丘社展、京都美術館に開催（同展は堂本印象画塾の展覧会。陳列総数59点。印象は六曲一双「雲収日昇」を出陳。受賞（東丘賞）作品、曲子光男「島の群」・古川雅司「昭和十三年に拾う」・沢野文臣「春」・三原清宏「楽園」・不二木阿古「春宵」・戸島光雄「探魚」）。日本美術年鑑 昭14</p>		
<p>6・5～9 第9回京都工芸美術展、京都美術館に開催。同展目録</p>		
<p>6・8～12 第1回日本新興南画院展、京都美術館に開催（旧日本南画院の関西系作が結成する同会の第1回展で、5・3～9 大阪市美術館での開催に引き続き開く。陳列総数51点。一般応募数93点中入選数13点。6・15～20 東京日本橋の三越に開催）。第9回同展出品目録、日本美術年鑑 昭14</p>		
<p>6・一 土田麦僊遺作、東京・京都に遺作展が開催されたのを機会に、京都美術館に寄贈される（帝展第14回出品作「平状」とその習作163点）。日本美術年鑑 昭14</p>		
<p>6・一 日本画家 杉本哲郎、昭12秋渡印シアジェンター窟院壁画の模写およびセイロンのシギリヤ壁画模写を作製、6・10 帰国。同模写は京都博物館に納めることになる。同上</p>		
<p>7・20 日本画家 渡辺公観没（明11・1・20 滋賀県生、名耕平、享年61。東山五条坂の袋中庵に葬る）。日本美術年鑑 昭14、塔影 14: 8</p>		
<p>7・24～26 京洛諸大家新作祇園会展、土井撰美堂に開催（祇園会にちなむ土井撰美堂の展観、菊池契月「京娘」・西村五雲「小犬」その他竹内</p>		
<p>栖鳳・村上華岳・徳岡神泉らの作品を展示）。日本美術年鑑 昭14</p>		
<p>7・一 北脇昇・小牧源太郎、創紀美術京都前哨展を朝日会館に開催。日本の前衛絵画</p>		
<p>9・16 日本画家 西村五雲没（明10・11・6 京都生、名源次郎、享年62。左京区仁王門川端東入ル頂妙寺に葬る）。塔影 14: 9、12、日本芸術院史</p>		
<p>10・3 高島屋 飯田政之助没（享年76）。高島屋百年史</p>		
<p>10・15～18 第4回新日本洋画協会展、京都美術館に開催（会員の作品約40点と特別陳列として独立美術秋季展をあわせ催す。集団制作「庭園」）。また北脇昇企画により超現実主義観測室を構成。コラージュ・フロッターージュといったシュルレアリスム技法の紹介や拾得物のオブジェを展観。日本の前衛絵画</p>		
<p>10・16～11・20 第2回文展⁽²⁾（徳岡神泉が審査員に加わる。川村曼舟「時雨るゝ山朝」菊池契月「交歓」など出品。石崎光瑠「霜月」は政府買上げとなる。12・1～15 京都陳列会を京都美術館に開催）。日本芸術院史</p>		
<p>10・一 入江波光、市立絵画専門学校より北支へ出張を命じられ、北京・大同などを訪れる。入江波光展目録</p>		
<p>11・1～6 白亜会第16回洋画展、京都美術館に開催（会員の出品作 207 点、他に指導者黒田重太郎の作品17点を展示）。日本美術年鑑 昭14</p>		
<p>11・3 日本画家 木島桜谷没（明10・3・6 京都生名、文治郎、享年62）。日本美術年鑑 昭14、塔影 14: 11</p>		
<p>11・9 西村五雲の高弟山口華楊をリーダーとし新たに農鳥社を結成（会員は五雲塾から西村卓三・前田荻邨・麻田弁次・河合健二・谷野圭一・川島浩ら）。塔影 14: 11、京都画壇</p>		
<p>11・10 松田尚之、東方文化研究所の依頼で狩野直喜博士の銅像を製作、京都北白川の同所に除幕式を挙行。日本美術年鑑 昭14</p>		
<p>12・11～17 徳力富吉郎創作版画展、寺町二条の芸艸堂画廊に開催。塔影 15: 1</p>		
<p>この年</p>		
<p>▷ 春 小牧源太郎、東京上野で開かれる第8回独立展に「民族病理学」を出品、警察官は陳列途中に反戦的で世をまどわすという理由で撤回させる。</p>		
<p>▷ 珊瑚会誕生（大丸では京都5大塾の新人に委嘱して毎年新作画展を開くことを決定、秋開催の第1回展は各塾3人ずつとしそのメンバーは、竹杖会：金島桂華・徳岡神泉・池田逢邨、菊池塾：宇田荻邨・板倉星光・松元道夫、西山塾：森守明・上村松篁・福田翠光、早苗会：案本一洋・勝田哲・三宅鳳白、西村塾：山口華楊・前田荻邨・麻田弁次）。塔影 16: 7</p>		
<p>▷ 青土社創立（京都在住の彫塑家が組織する。事務所：左京区修学院大林町16、松田尚之方。会員：松尾薫・松田尚之・徳力牧之助・田中源三・</p>		

京	都	府	参	考
<p>柴田和彦・山本節郎・岡本庄三・芦田政一・伊勢保三・加藤春平・矢野判三・丸山政次・西川享・吉川常雄・久保駒太郎。日本美術年鑑 昭14</p>			<p>香浦吾吾「花鳥図彩漆衝立」、楽吉左衛門「黒茶盤」・「雷文ほり白菓菓子鉢」、山鹿清華「手織錦果王将来壁掛」、小合友之助「新樹」、澤田宗山「寿松飾皿」・「双鱼陶硯」、清水正太郎「赫湖壺」・「初夏水盤」、皆川月華「彩繡二曲屏風花鳥図」、伊東翠壺「黄磁花瓶」、河合卯之助「游魚赤絵盛器」、楠部彌弼「彩挺桃果文飾皿」、山田楽全「畚花入」・「白椿乾漆香盆」、江馬長閑「秋の野蒔絵料紙文庫」、清水六兵衛「飛湖花瓶」・「朝陽香合」、岸本景春「刺繡二曲屏風寒帯」、宮永東山「粟田焼游鯉壺双」、三木表悦「浮模様塗輪華盆」、平野吉兵衛「銅鑿紋鼎香爐」・「銅蓮華式火爐」、鈴木表朔「梅模様香盆」、清風与平「瑠白瓷牡丹紋花瓶」、諏訪蘇山「色絵草花文花瓶」</p>	
<p>▷ 洋画家 旭谷左右没（明27生）。旭谷左右画集</p>			<p>(2)第2回文展（京都関係のみ） 審査員 菊池契月・川村曼舟・徳岡神泉・山口華楊・金島桂華・西山翠嶂・太田喜二郎・清水六兵衛・沼田一雅</p>	
<p>▷ 龍村織物美術研究所創立。近代日本の工芸展目録</p>			<p>会員出品 川村曼舟「時雨るる山湖」、菊池契月「交歓」 無鑑査出品 上村松園・福田平八郎「青柿」、楠部弥弼「彩挺蟠桃文花瓶」</p>	
<p>▷ 神阪雪佳を中心に嵯峨野会創立される。雪佳遺作集</p>			<p>特選受賞者 第1部 絵画 秋野不矩「紅裳」 日本芸術院史</p>	
<p>▷ 北脇昇らが中心となり創紀美術協会を結成（小牧源太郎も）。日本の前衛絵画</p>			<p>(3)第4回新日本洋画協会展出品 今井憲一「球体」・「球と母体」、井上稔「旅愁」・「作品A」・「作品B」、原田潤「作品第五（門）」・「作品第六」・「作品第七」、小栗美二「旦の二人像」・「翔」・「貝殻風景A」・「貝殻風景B」、川元進 連作「伝統」・「誕生」・「目覚め」、神野七五三男「くらげ」・「悪の花」、吉加江清「木の葉と蓮弁(対比的ニ)」・「海辺の詩」、田村一二「寡婦」・「牛祭り」・「食虫」、高橋竹三郎「まぼろし」・「夢」・「無題」、安田謙「女」・「女たち」・「女のむね」、松崎政雄「風景」・「粧ひ」・「力闘」、小石原勉「作品A」・「作品B」、小牧源太郎「生誕譜」・「遠望」・「祈り」、三水公平「曙」・「支那服を着たT氏」・「野」・「冬瓜」、北脇昇 観相学シリーズ「借景」・「変生」・「感傷構造」・「聚落」、島津冬樹「にほひ」・「白い鹿」・「月夜とポプラ」。</p>	
<p>▷ 日本美術院同人真道黎明、京都に移住。同上</p>			<p>集団製作「庭園」（同人15名）。 ○独立美術協会秋季展出品 林武「風景」、川口軌外「古寺(旧作)」、田中佐一郎「仲秋」、高島達四郎「肖像」、中山巍「嶽麓ノ花」、野口弥太郎「戸隠山ニテ」、松島一郎「花」、福沢一郎「春図」・「秋図」、児島善三郎「ダリヤ」、小林和作「秋」、海老原喜之助「顔」、清水登之「爆撃」、須田国太郎「風景」、鈴木保徳「塩焼キ場」、鈴木亜夫「虹」</p>	
<p>第4回新日本洋画協会展目録</p>				

京	都	府
<p>1・19～24 日本陶彫協会第1回展、東京日本橋三越に開催（同協会結成3年に至り開催、同人沼田一雅、八木一夫らにより）。日本陶彫協会目録 1・一 小川翠村、大阪四天王寺舞楽舎の壁画を完成。塔影 15:1 2・9～12 東京と京都の新人画家12名からなる綵尚会、尚美堂関長次郎により組織され、第1回展を銀座松坂屋に開催（関長次郎が先に組織した清尚会は、第1回展を開いただけで解散。綵尚会会員は京都から西村卓三・西山英雄・奥村厚一・加藤栄三・山本丘人・三谷十糸子・菊池隆志ら参加。同展は引き続き、3・14～17 京都大丸に開催）。 2・15 日本画家 加藤英舟没(明6名古屋生)。日本美術年鑑 昭15 2・一 土田麦僊作「妓生の家」(絶筆として未完成に終る)、下図案描類とともに京城の李王家美術館の買上げとなる。土田麦僊遺作集 3・13 橋本関雪、皇軍の姿を日本画に描くため中支に旅立つ。日本美術年鑑 昭15 3・20 伊谷賢蔵、北支方面に従軍絵画旅行を行う(6・9～12 戦跡写生展を朝日会館に開催)。日出 6:一 3・25～29 第12回青甲社展、京都美術館に開催(西山翠嶂「飛鳥」・堂本印象「迦葉作舞」・山内信一「春庭」・川上拙以「臥竜梅」・小川翠村「水温む」・上村松篁「春」・森守明「虚竹禅師」・福田恵一「蒙古」・福田翠光「白日」・三谷十糸子「雪」など)。西山画塾 青甲社 4・一 絵専、図案科を設置。同窓会名簿1961 5・1 北脇昇、「流行現象構造」を美術文化前哨展に出品。日本の前衛絵画 5・1 入江波光、朝鮮美術展のため出張。入江波光展目録 5・1～20 第4回市展、京都美術館に開催。市美術館と美術品 5・2～7 徳力家四兄弟展、大丸に開催(日本版画の富吉郎・時絵金唐草の彦之助・陶器の孫三郎・彫刻と洋画の牧之助4兄弟の総合展)。都市と芸術 287 5・16～25 第4回実在工芸美術会展、上野の東京府美術館に開催(同展の京都側入選者は中条昇・大町存・久保金平・山本孝甫・山田豊・奥村究果・高見九蔵)。同上 5・28～6・1 第10回京都工芸美術展、京都美術館に開催。第10回同展出品目録 5・一 京都から北脇昇・小牧源太郎が美術文化協会創立同人40人の中に加わる。同時に、独立美術京都研究所、新日本洋画協会から退会。日本の前衛絵画 6・3～5 京都工芸院陶芸部および日華道、花と陶もの展を京都美術館に開催(花びんは工芸院顧問清水六兵衛始め40余名が出陳、これに日華道の5名が挿花して陳列)。都市と芸術 288 6・10～12 第1回蒼原会展、名古屋丸善に開催(同会は京都日本画壇各塾の画家により組織さ</p>	<p>れる。会員は磯田又一郎・池田洛中・林司馬・浜田観・戸島光雄・奥村厚一・加藤美代三・高木富三・後藤貞之助・会津勝己・麻田弁次・沢宏毅・水野深岬・平間且陵)。塔影 15:6 6・14～19 中村大三郎画塾展、上野の東京府美術館に開催(同展は東都進出展における京都画壇塾展のトップをきったもの)。都市と芸術 288 6・16 日本画家 猪飼嘯谷没(明14・4・12京都生)。日本美術年鑑 昭15 6・20～25 第1回京都漆芸院展、戸島光阿弥の主宰で大丸に開催。都市と芸術 288 7・一 九耀会設立(会員：山口華揚・徳岡神泉・池田遙邨・板倉星光・森守明・前田荻邨・勝田哲・松元道夫)。塔影 15:6 8・一 京都南画界の有志、南潮会を結成(会員は水田硯山ら9名)。塔影 15:8 9・1～10 聖戦従軍素描展、京都東山の靈山画廊に開催(出品者は鹿子木孟郎・小早川秋声・田中佐一郎・小合保一郎)。都市と芸術 14:10 10・16～11・20 第3回文展⁽¹⁾(桐原紫峰が審査員に加わる。西山翠嶂「馬」など出品、徳岡神泉「菖蒲」、中村大三郎「三井寺」が政府買上となる。12・1～15 京都陳列会を京都美術館に開催)。日本芸術院史 10・26 京都工芸懇話会(京都商工会議所外郭団体)、京都工芸協会と改称(会長：大橋理祐、京都市工芸産業の振興と会員相互の親睦をはかり、講演会・見学・調査・研究等を行う)。京都商工会議所史 11・1～8 第6回新日本洋画協会展⁽²⁾、京都美術館に開催。同展目録 11・2 金島桂華、市立美術工芸学校教授を辞任。塔影 15:11 11・11 日本画家 村上華岳 神戸の自宅に没(明21・7・3 大阪生、名震一、享年52)。日本美術年鑑 昭15 11・11～14 橋本関雪聖戦画内示展、京都美術館に開催。市美術館と美術品 11・11～15 白亜会第17回洋画展、京都美術館に開催(作品総数200点、賛助出品 黒田重太郎の作品10余点)。同展目録 11・一 土田麦僊の門下生、一時解散の余儀なきに至った山南塾をたてなおし山南会を結成(事務所：右京区太秦組石町、徳力方、会員：稲田麦楓・徳力富吉郎・築地徹三・荻原涌石・恩田耕作・粥川伸二・川勝一止・松山政春・丸岡比呂史・福田豊四郎・小松均・木村楊照・清水句平・吹田草木)。日本美術年鑑 昭15、都市と芸術 昭14:12</p> <p>この年</p> <ul style="list-style-type: none"> ↳ 香取秀真、仁和寺金堂梵鐘を製作。京都の明治文化財 ↳ 村上華岳、『華岳裸集』を出版。華岳画集 ↳ 時絵家 山田楽全没(明8生)。京都の美術工芸100年展目録 	

参	考	日	本
<p>(1)第3回文展(京都関係のみ) 審査員 西山翠嶂・菊地契月・榊原紫峰・中村大三郎・榊本一洋・石崎光瑠・太田喜二郎・楠部弥弼・清水正太郎 会員出品 西山翠嶂「馬」 審査員出品 中村大三郎「三井寺」、榊本一洋「壇風」、石崎光瑠「晨朝」 特選受賞者 第1部 絵画 広田多津「モデル」 美術工芸 近藤悠三「柘榴図陶花瓶」 日本芸術院史</p> <p>(2)第6回新日本洋画協会展出品 服部勲「行路」(2点)「冬」、今井憲一「撮影」・「月蝕」・「菜果試作」・「虚飾の庭」・「原生林」、原田潤「夕、五時(十月)」・「夕、七時(十月)」、安田謙「クロッキーA. B. C. D.」、島津冬樹「作品A. B. C. D.」、神野七五三男「流水」・「木くらげの巢」・「流木」、藤井正俊「陶土」・「柿」・「夜の木々」、井上念「舞踊」・「荆節」・「秋態1」・「秋態2」、篠原邦夫「風景」、松崎政雄「二人像」・「自画」・「作品(白とムラサキ)」・「作品(生理的な)」・「肖像」・「鏡」、高橋竹三郎「無題」・「都会」・「風景」、高木四郎「思索1」・「思索2」、川戸伝「花」・「紅梅林」・「苔」・「鶏頭」、吉賀江清「葉脈の構成」・「市街(トゥーゲールト)」、田村一二「疑心」・「夜」・「求日」・「荆」、井沢元一「竹」・「晴日」・「浚渫船」・「室内」・「門」・「写場」・「屋上」・「疏水」・「四条大橋(記念)A. B. C. D.」、賛助出品：須田国太郎「禽鳥習作 1. 2. 3. 4. 5.」、田中佐一郎「刃土」</p> <p style="text-align: right;">第6回新日本洋画協会展目録</p>	<p>山口正城、市立第二工業学校玩具科教諭となる。日本美術年鑑 昭35</p> <p>彫金家 大久保猷興没(明9生)。京都の美術工芸100年展目録</p>	<p>1・12 洋画家 野田英夫没(明43生、享年30)。 2・28～3・31 ベルリンで日本古美術展(ドイツ政府主催、日本公開7・5～11)。 2・28～10・29 ゴールデンゲイト万国博、米 国サンフランシスコに開催(京都より奥村俊郎・宮崎平七・浅見賢一・岡本為治・宮下善寿・清水正太郎・河村喜太郎・辻晋六・石黒宗麿・山鹿清華ら出品)。京都貿易史 4・2～16 第14回国画展(梅原「南薩風景」、この年写真部をおく)。 4・10 陸軍美術協会結成(会長陸軍大将松井石根・藤田嗣治・中村研一ら)。 4・30～10・31 ニューヨーク万国博開催(日本画：菊池契月・西山翠嶂・橋本関雪、漆工：宮崎平七、陶磁器：沼田一雅・新開邦太郎・福田直一・河村喜太郎・河合卯之助・石黒宗麿、金工：小野正之助ら)。京都貿易史 5・17 美術文化協会結成(独立美術協会脱退の福沢一郎らと二科の前衛作家)。 6・8 文部省に法隆寺壁画保存委員会(委員長伊東忠太)設置、壁画模写始まる。 7・6～23 第1回聖戦美術展(陸軍美術協会、朝日新聞社共催)、藤島武二「蘇洲河激戦の跡」など。 9・2～10・3 第26回院展(古径「唐濁黍」、大観「麗日」、靱彦「天鈿女命と猿田彦神」、田中「鏡獅子試作」)。 9・19 閣議、9・18 の価格に物価を停止する緊急策を決定。 9・23 洋画家 岡田三郎助没(明2生、享年71)。昭15・2・14～20 遺作展。 11・23～12・5 第4回新制作派展(小磯良平「兵馬」、中西利雄「彫刻と女」、この年より彫刻部を置く、旧国画会々員本郷新、柳原義達ら)。 11・23～12・5 第3回一水会展(安井曾太郎「肖像F夫人像」など)。 12・一 伊東深水ら青衿会を作る。</p>	

京	都	府
<p>1・20 橋本関雪の「軍馬二題」、昭14年度朝日文化賞に選ばれる。 日本美術年鑑 昭16</p> <p>1・一 日本刺繍院、刺繍工芸の芸術探究と基礎建設を目的として創立される(事務所:東山区山科御陵原西町40。会員:長谷川文平・長村華城・岡村土佐生・由井康陽・村田春緑・山田誠一・福村健・酒井栄一・小林由松・清水順造・柴田儀蔵、参与:箸尾清)。 同上</p> <p>2・1~8 西沢笛歌御所人形12題、芸艸堂画廊に展観。 同上</p> <p>2・12 堂本印象、奈良県奉祝会の依頼で作品「樞原」を完成、樞原神宮に奉納。 同上</p> <p>2・15 木島桜谷の遺作および収集品を陳列する桜谷文庫、財団法人として設立認可を受ける(6・2 上京区等持院東町の遺宅において設立披露を催し内覧に供する)。 同上</p> <p>2・23 第1回羅星会開催(同会は麻田弁次・西山英雄・森戸国次・樋口富磨らが組織)。 塔影 16:3</p> <p>2・24、25 堂本印象の手になる大阪四天王寺五重宝塔内の御本佛および壁画、同寺五智光院内に陳列され、施主・檀信徒・その他関係者に展観。 塔影 16:3、日本美術年鑑 昭16</p> <p>2・27~3・3 第1回綵々会展、大阪大丸に開催(同会は菊池契月の門下によって組織される。第1回展の賛助出品者、菊池契月・前田荻邨・板倉星光・菊池隆志)。 塔影 16:3</p> <p>2・一 西山塾・菊池塾・堂本塾・農鳥社(西村塾)の4塾、皇紀2,600年を祝い尚美堂関長次郎のあっ旋で、優秀作家15名ずつを選び銀座資生堂に展覧会を開催(西山塾17~19日、菊地塾20~22日、堂本塾26~28日、農鳥社は西村五雲遺作展準備のため開期が遅れ6月に開催)。 塔影 16:2</p> <p>3・8 橋本関雪「両面愛染明王」・「待機」・「柳蔭洗馬」の下絵を終わり、これらを完成するため渡支。 日本美術年鑑 昭16</p> <p>3・12 漆工家 江馬長閑没(明14・12・14生、享年60、百万遍山内に葬る)。 日出 3・14、日本美術年鑑 昭16</p> <p>3・16~20 第6回春虹会展、東京日本橋の三越に開催(出品は竹内栖鳳「城外霞色」・川合曼舟「閑庭」・西山翠嶂「幽春」・上村松園「楠」・宇田荻邨「鴨」・石崎光瑤「寒江」・榊原紫峰「老梅」・福田平八郎「春水」・中村大三郎「菊慈童」など陳列総数15点)。 日本美術年鑑 昭16</p> <p>3・21~25 西村五雲遺作展、京都美術館に開催(作品の選択に意を用い、五雲の最もすぐれた部分を代表させる作品61点を陳列)。 同上</p>	<p>4・7~14 第10回独立美術協会展、京都美術館に開催(同展の京都開催は4年ぶり、須田国太郎「海亀」、田中佐一郎「赤田張夜宮」、小林和作ら)。 朝日 4・7、読売 3・15</p> <p>4・12 三都美工会結成(同会は東京・京都・大阪を中心とする工芸家50余名が、工芸の進歩向上と東西工芸家の親睦を目的として組織する)。 日本美術年鑑 昭16</p> <p>4・22~5・15 紀元2600年奉祝日本画大展、京都美術館に開催(大阪毎日新聞社主催の日本画公募展で文部省および京都市が後援。5・1~15開催の第5回市展は日本画部を大展に譲り、洋画・彫塑・工芸の3部をもってほぼ同時期に開催、総合展の形をとる。大展審査員は橋本関雪・西山翠嶂・堂本印象・小野竹喬・川合玉堂ら20名。搬入1,332点中入選210点。受賞者は文部大臣奨励賞和高節二、大毎・東日賞:江崎孝坪・浜田観・秋野不矩・川辺華堂・沢宏毅。佳作:東山魁夷・北沢映月・向井久万・熊坂東夷・中沢一橋・広田多津・立石春美。招待出品:竹内栖鳳「艶陽」、橋本関雪「柳蔭馬を流ふ」、菊池契月「孔雀明王」など)。 同上</p> <p>5・1~15 第5回市展、京都美術館に開催。 日本美術年鑑 昭16、市美術館と美術品</p> <p>5・21~26 第2回東丘社展、大阪大丸に開催(三輪晁勢「暖梢」以下50点、堂本印象の賛助出品「爽籟高清」六曲一双を陳列。受賞者は東丘賞下村正一・堺利彦・安藤寛。東丘次賞 戸島光雄・阪本音彦・妹脊平三・岩田登司雄・伊圭田洛中・井関雅夫・松尾冬青・無憂樹)。 日本美術年鑑 昭16</p> <p>6・15~17 華畝会第1回展、京都美術館に開催(会員:伴庄兵衛・赤松麟作・角野判治郎・新井完・太田喜二郎・安藤養茂)。 同展目録</p> <p>6・19 日本画家 喜多川玲明没(明33、京都生、享年41)。 塔影 16:7、日本美術年鑑 昭16</p> <p>6・29~7・1 富本憲吉・河井寛次郎・浜田庄司作品鑑賞会、日本民芸館主催で大毎会館(京都)に開催。 日本美術年鑑 昭16</p> <p>6・29~7・3 中村大三郎画塾展、京都美術館に開催。 同上</p> <p>7・1 京都美術館、紀元2,600年を期し国民文化昂揚のため同館の一部を開放し、この日から現代美術品の常設陳列を開始。 同上</p> <p>7・5~7 第1回山南会展、京都美術館に開催。 同上</p> <p>7・10 竹内栖鳳、鳥丸四条上ル孟宗山町の山鉾「孟宗山」にかける見送りを完成。佐藤梅軒宅で内覧に供する。 日出 7・11、日本美術年鑑 昭16</p>	

参	考	日	本
(1)紀元2600年奉祝美術展(京都関係のみ)	展覧会委員 川村曼舟・竹内栖鳳・西山翠嶂・太田喜二郎・清水六兵衛	3・27~4・5 第5回国画展(梅原「雲中天壇」、棟方志功「二菩薩釈迦十大弟子」、平塚運一「臼杵石仏」)。 3・一 大観「海」・「山」連作展開く。これによって得た50万円を、陸海軍飛行機生産のため献納。 4・11~19 美術文化協会第1回展(福沢一郎「山西図」ほか)。 4・20 陶芸家 宮川香山、横浜で没す(京都生、享年83)。 4・一 陸軍省、川端竜子ら12画家を大陸戦線へ派遣。この頃画家の従軍多し。 5・11~10・27 ニューヨーク万国博開催(京都から上村松園・宇田荻邨・川村曼舟・金島桂華・堂本印象・福田平八郎・浅見賢一・岡本為治・宮下善寿ら参加)。 京都貿易史	5・一 水彩連盟結成。 7・6 商工省・農林省、奢侈品等製造販売制限規則を公布(7・7 禁令)。 7・7 自由美術家協会、美術作家協会と改称、昭21元に復す。 7・7 藤田嗣治ら仏国より帰国。 10・1 紀元2600年奉祝展 ⁽¹⁾ (前期洋画彫刻10・1~22、後期日本画工芸11・3~24、主な美術団体が全部参加した連立展、梅原「紫禁城」、松岡寿「海老名弾正氏肖像」、柏亭「農村初秋」、須田「歩む鷺」、玉堂「彩雨」、栖鳳「雄風」)。 10・12 洋画家 長谷川利行没(明24・3 京都山科生)。 11・5~24 正倉院御物特別展、東京帝室博物館に開催。初の一般公開。 11・25 根津美術館設立認可(青山、根津嘉一郎収集の東洋美術品など)。 11・一 三井コレクション開かれる。 12・一 日本エッチング協会創立。
	委員出品 川村曼舟「微雨」、竹内栖鳳「雄風」、西山翠嶂「洛北の秋」		
	その他の出品 福田平八郎「竹」、河合栄之助「瑞穂花瓶」 日本芸術院史、日本美術年鑑 昭16		
		この年	▷ 小村雪岱没。

京 都 府	
<p>7・23、24 入江波光・小野竹喬・榊原紫峰の3名、佐藤梅軒主催の下に、新作画展を御池烏丸東入ル梅軒宅に開催（同時に別室において梅軒所蔵の土田麦麴・村上華岳の遺作を展観）。 日本美術年鑑 昭16、塔影 16:8</p> <p>7・一 丹波民芸協会（福知山市内記3丁目）発行の『丹波民芸』第3輯刊行（用紙は東八田村産の和紙）。 郷土と美術 昭15・8</p> <p>8・13 京都工芸家連盟結成、発会式を挙（京都美術協会が各部門の団体を解消し、陶器・金工・染織・漆器・木竹等美術工芸界の作家65名を組織して同盟を結成）。 日本美術年鑑 昭16</p> <p>8・14 日本画家 川北霞峰没（明8・9 京都生、名源之助、享年66）。 塔影 16:9、日本美術年鑑 昭16</p> <p>8・一 京都染織繡芸術協会結成（同協会は京都染織、刺繡工芸家が結成。事務所：左京区岡崎北御所町37、山鹿清華方。会員：稲垣稔次郎・小合友之助・田中貞三・中村鷗生・山鹿清華・佐野多景夫・岸本景春・皆川月華ら）。 日本美術年鑑 昭16</p> <p>9・8 帰還日本画家連盟結成（戦場から帰った京都画壇の有志らが、結束して彩管報国の信念を示すため組織したもの）。 塔影 16:10</p> <p>9・25 全日本染織図案家連盟創立総会、知恩院山内華頂会館に開催（連盟本部を商工会議所におき、東京・足利・京都・大阪の4部と連絡する全国的統一がなる。初代理事長落合万水）。 京友禪、図案年鑑 1</p> <p>9・一 入江波光、文部省より法隆寺壁画の模写を供囑される（林司馬・吉田友一を助手として阿弥院浄土変を担当。昭23・12、完成）。 入江波光展目録、市美術館ニュース 54</p> <p>9・一 世紀美術創作協会創立（西山翠嶂塾の中堅作家が結成したもの。事務所：東山区清水3丁目324 大高為山方。同人：今尾景春・戸田北遙・大高為山・奥村紅稀・寺田蘆秋・佐藤空鳴・宮尾光峯）。 日本美術年鑑 昭16</p> <p>9・一 京都陶磁器産業報国会結成（京都陶磁器工業組合傘下団体16組解散）。京焼百年の歩み</p> <p>9・一 京都彫塑家連盟創立（京都府に居住する彫塑家が組織し、製作の自粛強制・製作に必要な物資の共同購入・鑄造部の設備・展覧会の開催を目的とする。事務所：左京区修学院大林町16、松田尚之方。会員：西川亨・徳力牧之助・大西三四郎・岡本庄三・吉川常雄・田中源三・村井次郎・国安稲香・矢野判三・山本節郎・松田尚之・松尾薫・藤林重治・河野薫郎・芦田政一・島津良蔵・柴田和彦）。 日本美術年鑑 昭16</p>	<p>10・1 市立絵画専門学校および市立美術工芸学校、創立60年の記念式を挙。日本美術年鑑 昭16</p> <p>10・2 市立絵画専門学校および市立美術工芸学校、同校創立建議者の一人幸野煤嶺の胸像除幕式を絵専学校校庭に挙行（これは煤嶺の門弟竹内栖鳳・川合玉堂・清水六兵衛らが組織する凌霄会および同校関係により計画され、同校出身の彫刻家建畠大夢が製作成したもの）。 同上</p> <p>10・1～22 紀元2600年奉祝美術展（文展を中止した総合展。前後2回に分けられた。京都陳列会は11・3～17 洋画・彫刻、12・3～17 日本画・美術工芸を京都美術館に開催、江崎孝坪「出発」、須田国太郎「歩む鷺」政府買上げとなる）。 日本芸術院史</p> <p>10・5～22 紀元2600年奉祝京都文化展、京都美術館に開催（出品は「孝明天皇奉礼記念堂」・「伴大納言絵詞」・「源氏物語」・「名物藤四郎肩衛茶入」・「屋島合戦国祝」・「延喜式名帳」など上から現代にいたるまでの日本文化で京都に関係あるものを展覧）。 塔影 16:11、市美術館と美術品</p> <p>10・10 絵更紗美術協会設立。市美術館調書</p> <p>10・25～27 白亜会第18回洋画展、京都美術館に開催（作品総数200点。賛助出品：黒田重太郎の作品20余点）。 第18回白亜会展目録</p> <p>10・28 紀元2600年奉祝展第4部工芸部入選者発表、京都側の総出品150余点のうち123点が入選の好成績をおさめる。 朝日 10:30</p> <p>11・8～10 旭谷左右遺作古事記画展、朝日会館に開催。 日本美術年鑑 昭16</p> <p>11・12～17 第7回新日本洋画協会展、大丸に開催。 同上</p> <p>11・16、17 第1回染織繡芸術協会展、岡崎公会堂に開催（出品総数93点）。 同上</p> <p>12・3～7 第1回世紀美術創作協会展、岡崎公会堂に開催。 塔影 16:16</p> <p>12・7、8 橋本閑雪、文部省委嘱の建仁寺方丈の障壁画を完成、落慶式に先だち同寺で内覧に供する。 塔影 16:12、日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>12・一 鹿子木孟郎、昭12・12・17の南京入城式を記念描写した「皇軍堂々南京入城図」を陸軍省に献納。 日本美術年鑑 昭17、日出 12:7</p> <p>この年</p> <p>▷ 神阪雪佳、高野山金剛峯寺に下賜された天皇陛下直筆の額の表装外箱装飾図案を作成。 雪佳遺作集</p> <p>▷ 榊原紫峰、南禅寺天授庵の杉戸に「鷹」を描く。 榊原紫峰展</p>

参 考	日 本
<p>▷ 織物工芸家 喜多川平八没（元治1・2 京都生）。 自筆履歴書</p> <p>▷ 陶芸家 鈴木清、国画会展で国画賞を受賞。 京都 昭42・10・7</p> <p>▷ 作品「(a + b)²の意味構造」北脇昇・「多義図形」小牧源太郎（ともに第1回美術文化展出品）。 日本の前衛絵画</p> <p>▷ 森守明、市立絵画専門学校の講師となる。 日本美術年鑑 昭27</p>	

京	都	府
<p>1・1 竹内栖鳳、竹杖会から寿像を贈呈される。また『煤嶺遺墨』を刊行。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>1・22 京都府芸術作家組合創立。 経済月報 130</p> <p>1・30 九臯会解散（関長次郎のあつ旋で文展並びに院展系作家13人が結成する同会は、7周年にあたり新体制下の情勢を考慮して解散を決定）。 日本美術年鑑 昭17、塔影 17:2</p> <p>3・15～25 京都美術館、現代名作絵画展を開催（明治末期以来30余年間に著名作家が残した代表的な日本画30点、洋画20数点を展覧。いずれも各文展・帝展の最優秀作品）。 塔影 17:3</p> <p>3・18 山口華楊、市立絵画専門学校教授となる。 双葉</p> <p>3・28～30 第1回尚綱会展、日本橋の東京美術倶楽部に開催（同会は尚美堂関長次郎が組織したもので東京・京都の15作家から成る。会員：徳岡神泉・奥村土牛・金島桂華・鏡木清方・吉岡堅二・中村岳陵・上村松園・山口蓬春・山口華楊・安田鞆彦・前田青邨・福田平八郎・小林古径・菊池契月・杉山寧。4・11～13 京都岡崎公会堂に開催）。 塔影 17:3</p> <p>4・2～6 木島桜谷遺作展、京都美術館に開催（主催桜谷文庫、主として文展および帝展出品作品を陳列）。 日本美術年鑑 昭17、塔影 17:6</p> <p>4・3 洋画家 鹿子木孟郎没（明7・11・9岡山県生、号不倒、享年68）。日本美術年鑑 昭17、鹿子木孟郎小伝、日出 4・4</p> <p>4・10 京都日本画家連盟結成、第1回理事会を京大楽友会館に開催（京都在住の日本画家が時局に対処し彩管報国を目的として組織したもの。竹内栖鳳・菊池契月・西山翠嶂・橋本関雪・川村曼舟を顧問とし、竹杖会・西山塾・早苗会・菊池塾・堂本塾・農鳥社・中村塾等から理事を選出）。 日本美術年鑑 昭17、塔影 17:4</p> <p>4・15 西村卓三、市立美術工芸学校教諭となる。 双葉</p> <p>5・1 橋本関雪聖戦記念画展、東京日本橋の三越に開催（「両面愛染明王」・「玄猿白鶴」ほか8点を展示）。 日本美術年鑑 昭17、塔影 17:5</p> <p>5・1 京都日本画家連盟、知恩院山内華頂会館において発会式を挙げる。 塔影 17:5</p> <p>5・1～20 第6回市展、京都美術館に開催。 日本美術年鑑 昭17</p> <p>5・6 田ノ口青兎、市立美術工芸学校教員となる。 双葉</p> <p>5・30 京都文化連盟結成。 塔影 17:6</p> <p>6・6 皇国芸術京都連盟発会式挙げる（京都市在住無所属作家が、国画の伝統的精神に立脚し新時代の絵画芸術の創建を目的として結成、理事長杉本哲郎、理事岡山聖虚・平井樗仙・内藤堪土・角田素江・久保飛路史・小早川好古・後藤秋崖）。 日本美術年鑑 昭17</p> <p>6・11～15 青甲社海軍献納画展、東京日本橋</p>	<p>の高島屋に開催（主催海軍協会、後援海軍省、西山翠嶂画塾青甲社の創立20周年を記念するため、塾関係の新旧作家を動員し、帝国軍艦の艦名にちなんで製作された一種の課題70数点を、献納を前に一般公開したもの、西山翠嶂「日出る処」(軍艦扶桑)・堂本印象「住吉神社」(軍艦長門)・秋野不矩「天竜川二題」・西山英雄「妙高」など80点を陳列)。5・16～18 京都岡崎公会堂にも開催。 日本美術年鑑 昭17</p> <p>6・21～23 第1回農鳥社展、京都美術館に開催。 同上</p> <p>7・3～7 華畝会第2回洋画展、京都美術館に開催。 同上</p> <p>7・4 上村松園、帝国芸術院会員に任命される。 上村松園集、日本芸術院史</p> <p>7・15 橋本関雪、昭14第1回聖戦美術展出品作「江上雨来る」を竹田宮殿下に献上。 日本美術年鑑 昭17</p> <p>7・15～30 小川芋銭遺作展および現代美術7月陳列、京都美術館に開催。 市美術館と美術品、日本美術年鑑 昭17</p> <p>8・7 故川北霞峰の作品「温泉のほとり」(四曲屏風片双。昭4 帝展出品)、京都美術館に寄贈される。 国画 1:1</p> <p>8・8 大東南宗院結成（小室翠雲ら南画人が絵画芸術によって日滿華3国間の理解を深め団結を図ることを目的として組織する。京都からは興亜南画院・菁莪社・心印画塾 京都支部などが参加）。 日本美術年鑑 昭18、国画 1:1</p> <p>9・26～10・1 明治洋画回顧展、京都美術館に開催（田村宗立「茶摘之図」、伊藤快彦「新島襄先生肖像」など約60点を展示）。 朝日 9・26、日出 9・15</p> <p>9・28～10・12 第28回日本美術院展、京都美術館に開催。 日本美術年鑑 昭17</p> <p>10・16～20 白亜会第19回洋画展、京都美術館に開催。 同上</p> <p>10・16～11・20 第4回文展⁽¹⁾（南画家白倉嘉入が審査員に加わる。橋本関雪「夏夕」、上村松園「夕暮」など出品。11・29～12・13 京都陳列会を京都美術館に開催）。 日本芸術院史</p> <p>10・22 加藤一雄、市立絵画専門学校教授となる。 双葉</p> <p>10・31 上村松園、三谷十糸子とともに華中鉄道の招きにより、皇軍慰問のため中支に出発（12・1 帰国）。 国画 1:3、日本美術年鑑 昭17</p> <p>11・3 新設の洛西画家隣組常設展、嵐山保勝会の後援で開催（洛西画家隣組は嵯峨在住者を中心とするもので、新体制運動に即応して組織的に結成された画家隣組としては日本で最初のもの。顧問の川村曼舟・中村大三郎を始め堀井香坡・柳原苔山・山本紅雲・佐野光穂ら各派各塾が合同し30余名が参加。これに京都日本画家連盟、皇国芸術京都連盟の会員も加わる。常設展は小品色紙等を展示）。 国画 2:2</p>	

参	考	日	本
(1)第4回文展（京都関係のみ） 審査員 宇田荻邨・小野竹喬・白倉嘉入・堂本印象・福田平八郎・窠本一洋・岸本景春・楠部弥弼・沼田一雅・清水正太郎 会員出品 上村松園「夕暮」、橋本関雪「夏夕」 審査員出品 白倉嘉八「細雨流水」、宇田荻邨「林泉」、窠本一洋「慈雨」 特選受賞者 第1部 絵画 向井久万「男児生る」 美術工藝 鈴木清「茄子之図大鉢」、稲垣稔次郎「善隣譚染屏風」、森野嘉光「塩葉枇杷図花瓶」 日本芸術院史		3・5 福沢一郎・滝口修造、拘引される。 7・1～20 第2回聖戦美術展、日本美術協会に開く（藤田嗣治「哈爾哈河畔の戦闘」、小磯良平「娘子関を征く」）。 7・21 内務省の指示により、美術雑誌第1次統合（既刊の全誌を廃刊し、7・31『新美術』など8誌を創刊）。 9・1～20 第18回院展（靱彦「黄瀬川の陣」、奥村土牛「遅日」、中村貞以「吉野」）。 10・16～11・20 第4回文展（伊東深水「現代婦女図」、島田墨仙「塙保己一」、松園「夕暮」、藤田「少女」、小磯「斉唱」）。 12・8 ハワイ真珠湾空襲、＜大東亜戦争＞はじまる。	
11・14～20 村上華岳追憶展、京都美術館に開催（その遺作および遺品70余点を陳列）。 国画 1:4、2:1、日本美術年鑑 昭17		11・17～19 須田国太郎日本画展、銀座資生堂に開催。 国画 1:4	
11・26 市立絵画専門学校研究科東都出張展覧会開催。 国画 2:1		11・26 京都商工会議所、芸術保存に関し府知事に陳情。 京都商工会議所史	
12・15 陶芸家 初代宮永東山没（明1・9・19石川県生、名剛太郎、享年74）。 日本美術年鑑 明45、都市と芸術 304		12・31 福永俊吉、市立絵画専門学校助教授となる。 双葉	
この年 ▷ 水田竹圃門青莪会会員一同が組織していた南潮社、大東南完院への合同が決まり解散（これより同院の院人および青莪会会員として活動することになる）。 国画 1:4 ▷ 森口華弘、丸川工芸染(株)を設立（昭18、企業整備令により解散）。 自筆履歴書 ▷ 入江波光、京都市より二条城の顧問を囑託される。 入江波光展目録			

京	都	府
<p>1・4 工芸図案家 神阪雪佳没(慶応2・1・12 京都生、名吉隆、享年77、寺町四条下ル大雲院に葬る)。 毎日 1・5、雪佳遺作集</p> <p>1・15 京都日本画家連盟、全会員が各2作ずつ絵画を製作し海軍部に献納。 国画 2:2</p> <p>1・22~2・7 富岡鉄斎遺墨展、東京府美術館に開催(主催国民美術協会・東京日日新聞社。「維新以来勤王敬神の精神を一管の筆に托して南画壇に異彩を放った」鉄斎から今日の画家は学ぶべきである、との趣旨により、「二見浦雪景図」・「楠公訣別図」・「七福神図」・「名所十二景図」・「古佛龕図」など300余点を展覧)。 日本美術年鑑 昭18、国画 2:1</p> <p>2・9~13 伊谷賢蔵油絵個展、銀座青樹社に開催(華北・蒙疆の風物を描いた同作家の作品20余点による東京最初の個展、「山村の朝」・「景山より北海を望む」など)。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>2・10~15 第2回聖戦美術傑作展、大丸に開催(主催陸軍美術協会・日出新聞社、後援陸軍省大日本国防婦人会京都地方本部、百余点を展示)。 国画 2:3、日本美術年鑑 昭18</p> <p>3・5 全国染織図案連盟京都支部、皇軍慰問のため肉筆絵扇千本(時価 5,000円)を京都師団恤兵室に献納。 都市と芸術 305</p> <p>3・8 京都染織繡芸術協会、陸海軍兵士慰問のため刺繡の美術作品34点を完成。これを山鹿清華が陸海軍当局に各17点ずつ献納(海軍省献納者:皆川月華・稲垣稔次郎・中村鶴生ら。陸軍省献納者:岸本景春・小合友之助・菅尾清・山鹿清華ら)。 同上</p> <p>3・8~10 陸海軍献納作品展、丸物に開催(主催は京都在住の工芸美術家が結成する京都府芸術作家組合。陶芸・漆工・染織・金工の諸家150余名の作品約300余点を展示)。 同上</p> <p>3・31 前田荻邸、市立絵画専門学校助教諭となる。 双葉</p> <p>3・一 小早川秋声、九段国防館 壁画を完成(昭16、5点・昭17、4点完成)、愛国婦人会京都府支部から陸軍省に献納される。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>3・一 堂本印象、弘法大師御遠忌奉讃会長清浦奎吾の委嘱で昭11から執筆の十六大菩薩尊像(高野山根本大塔の内陣十六大柱の柱絵)を完成。 同上</p> <p>4・3~19 市立絵画専門学校卒業制作回顧展、京都美術館に開催(京都美術館が絵専学校創立以降、同校より買上げの日本画卒業制作品を展示したもの。出品は明40第1回卒業生土田麦穂・小野竹喬・村上華岳・入江波光らから昭16第31回卒業</p>	<p>生作品に至る137点)。</p> <p>国画 2:5、市美術館と美術品</p> <p>4・16~19 鹿子木孟郎遺作展、新日本美術会主催で岡山の金剛荘に開催。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>4・一 京都刺繡同業組合、組合長田中利七らの努力で満州国皇帝に献上する刺繡屏風を完成(西村紫雲の原画により、延人員約200名の手を要して製作)。 同上</p> <p>4・一 竹内栖鳳、三笠宮殿下御結婚記念として京都府より献上画「海幸山幸」を描く。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>5・1~20 第7回市展、京都美術館に開催。 同上</p> <p>5・5~10 第5回東丘社展、大阪大丸に開催(画塾の共同製作「大東亜戦争画展」をはじめ、「轍の響」・「歓送」・「凍雪」などの戦争画を展示)。 同上</p> <p>5・15 肖像画家 吉田柳外没(岐阜県生、享年64)。 同上</p> <p>5・20 小野竹喬、岡山県の依頼で同県護国神社本殿用四季山水屏風を完成奉納する。 同上</p> <p>5・21 京都商工会議所、工芸関係組合代表者と合同で、特殊工芸技術並びに新興高級品製造技術保存に関し協議懇談する。 京都商工会議所史</p> <p>5・1 北脇昇・小牧源太郎・吉加江清・小石原勉・原田潤の5人、第3回美術文化展に共同制作「鴨川風土記序説」を出品。 日本の前衛絵画</p> <p>6・16 洋画家 伊藤快彦没(慶応3・7・8 京都生、享年76)。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>6・18~22 華畝会第3回洋画展、京都美術館に開催。 同上</p> <p>6・23~28 陶華会第1回陶芸展、大阪心斎橋の大丸に開催(同会は陶芸家清水正太郎・米沢蘇峰・森野嘉光・清水祥次・伊東翠壺・岡本為治の6名が結成したもの)。 都市と芸術 308</p> <p>6・一 竹内栖鳳、陸軍省の依頼で支那事変行賞陸軍関係者に下賜される賜品の下絵(二重橋から宮城を拝する図6点)を完成。高島屋・西陣織物工業組合が図額製織)。 日本美術年鑑 昭18、西陣織物館記</p> <p>7・5 日本自由画壇解散(大8・11 文展廃止にともなう創立以来23年の歴史をもつ同画壇は、時代の変遷に鑑み解散する。なお解散までに物故した同人、その他関係者の追善法要を、洛東南禅寺天授庵に執行する)。 国画 2:8</p> <p>7・5~19 富田溪仙遺作展、7周忌に際し京都美術館に開催。 国画 2:8、市美術館と美術品</p> <p>7・21~26 第1回朴人社展、京都大丸に開催。 日本美術年鑑 昭18</p>	

参	考	日	本
(1)第5回文展(京都関係のみ)			
審査員			
池田遙邨・宇田荻邸・西山翠嶂・福田平八郎・山鹿清華・岸本景春・清水六兵衛			
会員出品			
橋本関雪「防空壕」			
審査員出品			
池田遙邨「三尾四季之図」、宇田荻邸「水」			
特選受賞者			
第1部 絵画			
広田多津「大原女」			
美術工芸			
河合榮之助「磁器柿花瓶」	日本芸術院史		
		1・一 安田靫彦の「黄瀬川の陣」が昭16年度朝日賞を受ける。画家だけの美術家大会が開かれ職域奉公の趣旨により洋画家800名が東京府美術館に参集、1人1点の献画を決議する。	
		2・一 日本美術院同人の軍用機献納展、同院に開催。	
		2・一 東邦彫塑院、日本彫塑家連盟の結成を機に解散。	
		3・19 日本画家報国会結成(全国の日本画家2500人による。日本画家報国会軍用機献納作品展、三越に開く)。	
		3・一 陸海軍、それぞれ戦争記録画製作のため、藤田嗣治・中村研一・宮本三郎・小磯良平・安田靫彦・川端竜子・福田豊四郎・山口蓬春・吉岡堅二・伊原宇三郎・寺内萬次郎・猪熊弦一郎・中山巍・田村孝之介・清水登之・鶴田吾郎・堂本印象の16名を南方各地派遣することを決定。4月~5月出発。	
		7・18 彫刻家 長沼守敬没(安政4生、享年86)。	
		7・一 造営彫塑人会、国威の宣揚とモニュメンタルな彫塑作品をめざして、高村光太郎・清水多嘉示・中村直人・泉二勝麿など文展、院展、旧国展の彫刻家を網羅して結成される。	
		8・一 大東亜美術会(会長有馬頼寧)が結成される。	
		10・一 岡倉天心30年忌に際し、天心祭が東京美術学校で開かれる。	
		11・一 川村曼舟・木村武山没す。	
		11・一 猪熊弦一郎・伊藤康・谿伊之助・里見勝蔵・須田国太郎ら、竹頭会を結成。	
		12・3~12・27 第1回大東亜戦争美術展(藤田嗣治「12月8日の真珠湾」・「シンガポール最後の日」、中村研一「コタバル」、宮本三郎「山下・パーシバル両司令官会見図」など、日本画31点、洋画181点、彫刻47点、ポスター7点の戦争記録画作品が展覧される)。	
		12・一 渡辺幽香没。	
		この年	
		▷ 芸術各界の代表者、大政翼賛会と提携し愛国運動として献艦運動を展開する。	

京 都 府	参 考 日 本
<p>7・1 須田国太郎、満州国国展審査のため、福田平八郎などととも渡満し、雲崗石窟を訪れたり、平壤博物館・李王家博物館などを見てまわる。油絵なども描く。 須田国太郎</p> <p>8・1 京都日本漆画家連盟結成、創立総会を四条菊水に開催（京都漆芸院を解消して結成、濃漆画・淡漆画・工芸の3部を設け日本独特の漆芸の研究普及を目的とする。事務所：左京区浄土寺西田町12、戸島方。顧問：六角紫水、委員長：戸島光阿弥、常任委員：松岡正雄・木村天紅・井上彦三郎・山路光甫）。 日本美術年鑑昭18、都市と芸術 306、308</p> <p>8・23 日本画家 竹内栖鳳没（元治1・11・22京都生、名恒吉、享年79、洛東黒谷金戒光明寺に葬る）。 日本美術年鑑 昭18、日本芸術院史</p> <p>8・24～30 第2回興亜南画院展、京都美術館に開催。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>8・一 皇国芸術京都連盟、皇芸会と改称し京都日本画家連盟に加入、研究団体として杉本哲郎らが皇芸会国画研究所を設置する。 同上</p> <p>8・一 清水六兵衛・同正太郎、それぞれ着彩花見幕花瓶・着彩葡萄文花瓶を製作、満州建国十周年慶祝会を通じて満州国皇帝に献上する。 同上</p> <p>9・10～13 第3回山南会展および土田麦僊遺作陳列、京都美術館に開催。 同上</p> <p>9・27～10・3 第29回日本美術院展京都展、京都美術館に開催。 同上</p> <p>10・13～18 須田国太郎満蒙素描展、大阪の阪急に開催。 同上</p> <p>10・16～18 第9回新日本洋画協会展、京都美術館に開催。 同上</p> <p>10・16～11・20 第5回文展⁽¹⁾（橋本閑雪「防空壕」を出品。この年審査員となった池田遙邨の「三尾四季の図」は政府買上げとなる。11・28～11・23 京都陳列会を京都美術館に開催）。 日本芸術院史</p> <p>10・20～25 黒田重太郎個展、大阪の阪急に開催。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>10・25～29 第12回京都工芸美術展、京都美術館に開催（主催京都工芸美術協会、後援商工省、山鹿清華・河井寛次郎・清水正太郎・岸本景春らが出品。11・11～15 東京日本橋の高島屋でも開催）。 同上</p> <p>11・3、4 佳都美村工芸展、粟田青蓮院（京都）に開催。 同上</p> <p>11・7 日本画家 川村曼舟没（明13・7・9京都生、名万蔵、享年63）。 日本芸術院史、日本美術年鑑 昭18</p>	<p>11・8～12 第1回10宜会展、東京日本橋の三越に開催（同会は京都作家10氏の会で、会員は石崎光瑠・堂本印象・徳岡神泉・小野竹喬・金島桂華・中村大三郎・宇田荻邨・山口華楊・案本一洋・福田平八郎）。 国画 2:11</p> <p>11・17～22 橋本閑雪聖戦40年展、大丸に開催。 同上</p> <p>11・一 竹頭会結成（猪熊弦一郎・伊藤康・碓伊之助・里見勝蔵・須田国太郎らが、絵画研究と日本画材料による試作品を発表するため同会を組織）。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>12・28 市立絵画専門学校長および市立美術工芸学校長に同絵専教授中井宗太郎が発令される。 国画 3:1</p> <p>12・28 工学博士 鶴巻鶴一没（明6新潟県生、享年70）。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>12・28 日本画家 岡文濤没（享年68）。同上</p> <p>12・一 中村大三郎、京都霊山護国神社絵馬殿奉納画として「醜の御循」を完成。 同上</p> <p>この年</p> <ul style="list-style-type: none"> ▷ 五条会解散、和煌会結成。京焼百年の歩み ▷ 京都美術倶楽部、京都美術館と社名変更。 国画 2:3 ▷ 第2竹杖会結成（10年前栖鳳塾竹杖会の研究会解散以来、丹丘・葱青・竹立等小会が併立して研究を続けていたが、時局に鑑みこれら小会を解散、大研究会として再び竹杖会を興すことになる。会員は西山翠嶂・上村松園・石崎光瑠・小野竹喬・金島桂華・徳岡神泉・前田遙邨ら50余名）。 国画 2:1、5 ▷ 4代秦蔵六、二科会工芸部会員となる。 自筆履歴書 ▷ 洋画家 長谷川良雄没（明17京都生）。 日本美術年鑑 昭18

京	都	府
<p>1・9 京都洋画家連盟発足、岡崎市公会堂に結成式を挙行(約150名が一丸となり、大戦下の芸術報国の実をあげるためと、相互の研究便宜を計るため。顧問・理事には翼賛会府・市支部・市教育局職員がなり、幹事は川端弥之助・錦義一郎・今井憲一の3名。委員は伊谷賢蔵・都鳥英喜・太田喜二郎・黒田重太郎ら。第1回総会において、最初の事業として、陸海軍の武勲に対する感謝と慰問のため、全員が献画することを満場一致で可決。総会后、全会員そろって平安神宮に参拝、芸術報国と連盟の健全な発達を祈念する)。 京都1・10</p> <p>1・13 京都陶芸7小組合結成(国策に順応した強力体制の整備を進めていた京都府芸術作家組合陶芸部が7小組合を結成、京都陶芸作家第一工業小組合・理事長河村喜太郎、同第二工業小組合・理事長河村喜太郎、同第三工業小組合・理事長伊藤義治、同第五工業小組合・理事長浅見五郎助、同第六工業小組合・理事長清水正太郎、同第七工業小組合・理事長新井謙也、同第八工業小組合・理事長宮下善寿)。 同上</p> <p>1・14 有鄰館館長藤井善助没(享年71)。 日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>1・30 早苗会解散。 国画 3・2</p> <p>2・11 釜師 13代大西浄長(慶応3・1・27京都生、名清右エ門、享年78)。 19代自筆履歴書</p> <p>3・1 耕人社、平安神宮前に結成式を挙行(山元春拳門下の早苗会解散後有志が集まり結成。事務所：中京区釜座通二条下ル、三宅鳳白方。理事長：榎本一洋、理事：武田鼓葉・中野草雲・三宅鳳白、参事：林文塘・玉舎春輝。7月展覧会を開催)。 日本美術年鑑 昭18、国画 3：3</p> <p>3・一 大日本工芸会京都支部(支部長：安藤知事)が設置され、資格申請標準に基づき京都における芸術・技術保存のための有資格者、工芸品およびその生産者を申請(許可あるものに禁止資材の配給を行ない、「芸」・「技」の証紙を印して製品を販売)。 京都 3・27</p> <p>4・3～20 佐伯祐三遺作展、京都美術館に開催。 市美術館と美術品、日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>4・23 日本画家 不二木阿古没(明29、兵庫生、享年48)。 国画 3：6、日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>4・27～30 京都日本画家連盟献納画展、京都美術館に開催。 日出 4・16</p> <p>5・1～20 第8回市展、京都美術館に開催。 市美術館と美術品</p> <p>5・3 陶芸家 河合瑞豊没(享年81)。 日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>5・8～16 竹内栖鳳回顧展、東京日本橋の高島屋に開催。 国画 3：5</p> <p>5・20～6・5 森寛齋特別展、京都博物館に開催。 森寛齋遺作展目録</p>	<p>5・一 山口華楊、海軍省派遣画家としてジャワなどへ行く(大東亜美術展に「基地に於ける整備作業」を出品)。 山口華楊作品集</p> <p>5・一 井島勉、京大文学部助教授に就任(昭22・4教授に就任、美学美術史を講義)。 京都大学70年史</p> <p>7・8 金属認定保存委員会(委員長：野間内政部長)開催(戦時下の金属回収に応じて、京都市内の銅像・美術品等を回収するか保存するかを検討)。 京都 7・8</p> <p>8・10～11 西陣織物技術研究会主催の西陣織物技術保存資料展示会、京都美術館に開催(西陣一帯の業者67会員並びにその祖宗の力作200余点を展示)。 京都 8・11</p> <p>9・30 西陣織物業第1次企業整備方針により自由廃業申出を受けける(第2次は11・18、第3、第4は翌年。人的資源の軍需工場への供給と機械の買上げが目的。西陣機械業衰微)。 西陣織物館記</p> <p>9・一 黒田重太郎、中川紀元・鍋井克之とともに二科会会員を辞退。 京都洋画の黎明期、京都 9・7</p> <p>10・12 美術工芸界功労者、中沢岩太没(安政5・3・29福井生、幼名東重郎、号北荘、享年86)。 日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>10・16～11・20 第6回文展⁽¹⁾(上村松園が審査員に加わる。橋本閑雲「霧」・上村松園「晴日」など出品。12・1～12・15 京都陳列会を京都美術館に開催)。 日本芸術院史</p> <p>10・29～31 第10回新日本洋画協会記念展、京都美術館に開催。 日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>11・6～23 京都美術館開館10周年記念展開催(所蔵品を中心とする)。 市美術館と美術品</p> <p>11・12 洋画家 都鳥英喜没(明6・11・26千葉県生、享年71)。 日本美術年鑑 昭19-21、毎日 11・15</p> <p>11・一 太田喜二郎、陸軍臨時囑託恤兵部付を命ぜられ中支方面出張。 日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>12・5 洋画家 寺松国太郎没(明9 岡山県生、号坦齋、享年68)。 同上</p> <p>12・6 京都漆芸協会創立総会開催(在洛作家70余名よりなる)。 京都 12・4</p> <p>12・17 龍村平蔵、第3回野間賞(美術奨励賞)を受賞。 日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>この年</p> <p>▷ 京都陶磁器統制組合創立。京焼百年の歩み</p> <p>▷ 明石染人『日本染色工芸史』(上)刊。 日本美術年鑑 昭35</p> <p>▷ 榊原紫峰、関西邦画展に「朝露」を出品。 榊原紫峰展</p>	

参	考	日	本
(1)第6回文展(京都関係のみ)	審査員 宇田萩邨・上村松園・金島桂華・菊池契月・中村大三郎・福田平八郎・黒田重太郎・須田国太郎・松田尚之・河井寛次郎・皆川月華・山鹿清華 審査員出品 中村大三郎「山本元帥」、宇田萩邨「秋草」	1・一 昭17年度朝日文化賞に藤田嗣治「シンガポール最後の日」、中村研一「コタバル」受賞。	
特選	第1部 絵画 向井久万「紙漉き」、沢宏靱「夕映」 美術工芸 岡本為治「白瓷盛器」 稲垣稔次郎「牡丹之図和紙糊絵屏風」	2・10～28 皇太子殿下御誕辰記念日本近代美術館建設明治美術名作大展示会(「悲母観音」・「大葉子」・「鮭」など)。	
		2・一 陸軍美術協会の中堅作家、画家青年隊を結成する。長谷川春子、藤川栄子、三岸節子らを中心に女流美術奉公隊を結成。	
		3・19 洋画家 藤島武二没(慶応3生、享年77)。11・23～12・2 遺作展。	
		3・一 川崎小虎・加藤栄三・山本丘人・田中申吾・小堀安雄・東山魁夷ら国土会を結成。	
		4・21～30 新人画会結成(松本竣介・巖光・麻生三郎・鶴岡政男ら、第1回展、日本楽器画廊に開催)。	
		5・18 日本美術報国会創立(大政翼賛会文化部、情報局、文部省の指導による。会長：横山大観)。	
		5・18 日本美術及工芸統制協会結成(大日本工芸会が日本画資材統制協会・美術家連盟・工芸美術作家協会を統合して結成。理事長：児玉希望、日本美術報国会と表裏一体となり、日本画・油絵・彫塑・工芸美術・産業工芸の5部門について、技術者の資格認定、絵具・画布・工芸材料の配給・販売価格の決定、規格の統一選定等の統制を行なうことになる)。	
		6・6 洋画家 中村不折没(慶応2生、享年78)。	
		6・一 島田墨仙没。	
		8・一 跡見玉枝没、田口省吾没。	
		10・一 日本漆芸院は解散し、日本美術及び工芸統制協会の第4部になる。	
		10・一 美術雑誌の統合。第1次統合によって発行されていた『国画』『新美術』『生活美術』『日本美術』『旬刊美術新報』『美術文化新聞』は情報局の指示により10月をもって廃刊。昭19年1月号から『新美術』(一般誌)、『制作』(専門誌)の両種の雑誌を日本美術出版(株)から発行することになる。	
		11・20 洋画家 国枝金三没(明19大阪生、享年58)。	
		12・8～1・9 第2回大東亜戦争美術展、都美術館に開催(宮本三郎「海軍落下傘部隊メナド奇襲」)。	
		12・24 松本亦太郎没(慶応1・9・15高崎生、享年79)。 日本美術年鑑 昭19-21	

京	都	府
1・8 陶芸・染織・漆芸・金工などの工芸作家100人、美術作家勤労報国隊を平安神宮に結成。 日本美術年鑑 昭19-21		7・8 陶芸家 13代楽吉左衛門没(明19生、名惺入、享年58)。 京都工芸大観、日本美術年鑑 昭19-21
1・30 日本画家 佐藤光華没(明20京都生、享年48)。 同上		7・15~31 陸軍献納画展(帝国芸術院会員による。上村松園「牡丹雪」・「待月」、西山翠嶂「豊艶」・「東山春月」、菊池契月「菊」・「白鹿」、橋本関雪「霜鷹」・「白太夫」など出品)。 日本芸術院史、日本美術年鑑
2・1~29 戦艦献納展(帝国芸術院会員による、上村松園「晴日」・「新螢」・「鏡山のはつ女」・「静」、菊池契月「稚子文殊」・「勝海舟」・「坂本竜馬」・「立春」・「菊」、橋本関雪「牛」・「晨啄」、西山翠嶂「威振八荒」・「海上日出」を出品)。 日本芸術院史、日本美術年鑑		8・13 図案家 本野精吾没(享年63)。 日本美術年鑑 昭19-21
2・3 高島屋 4代飯田新七没(安政6京都生、享年86)。 日本美術年鑑 昭19-21		8・一 楠部弥弑・伊東陶山・伊東翠壺・近藤悠三・米沢蘇峰ら近畿陶芸作家協会員20数人は高山耕山工場で挺身して重要化学機器を生産。 朝日 11・4
3・8~22 第2回大東亜戦争美術展、京都美術館に開催。 同展目録		11・25~12・15 文部省戦時特別美術展 ⁽¹⁾ (文展は中止。橋本関雪「香妃戒装」など出品)。 日本芸術院史、日本美術年鑑
3・16 洋画家 林重義没(明29兵庫県生、享年49)。 日本美術年鑑 昭19-21		11・一 徳力富吉郎、島津製作所に入所、増産に従う傍ら「増産版画」を制作。 朝日 11・4
3・一 太田喜二郎、軍事保護院の依頼により四国松山に遺家族を慰問。太田喜二郎遺作展図集		11・一 京都染織繡芸術協会、美術掛額80点を朝日新聞社を通じて、陸軍飛行学校・海軍予科練へ献納(山鹿清華・岸本景春・皆川月華・小合友之助・中村鶴生ら)。 朝日 8・13、11・4
3・一 太田喜二郎、60号の大作「安徽省団山における郷土部隊奮戦」の記録画を完成。 京都 3・10		12・26 京染会(財)認可され、西洞院角の目技街に所有の建物を京染会館として経営することになる(同会は、染色用機械器具・各種参考品等を利用し、草根木皮を染料として作った平安朝千年の歴史ある京染を始め、明3頃からの人造染料による先人の遺業を永久に保存するのが目的)。 京都 昭21
4・1~15 京都美術館常設4月陳列、同時に都鳥英喜遺作展開催。 市美術館と美術品		この年
4・20 金工 3代秦蔵六没(明26京都生、享年52、妙満寺に葬る)。 京都 4・23		▷ 独立美術京都研究所閉鎖。 須田国太郎
5・22~6・6 神坂雪佳遺作品展、京都美術館に開催(同館主催、佳都美会後援)。 雪佳遺作集		▷ 明石染人、鐘ヶ淵紡績(株)本部繊維部長に就任(昭22退社)。 日本美術年鑑 昭35
6・20~25 海軍献納漆芸展、大丸に開催(京都漆芸協会主催、大政翼賛会・京都新聞社後援、番浦省吾・魚野自醒・堂本漆軒・井田宣秋・黒田辰秋ら)。 京都 6・21		▷ 洋画家 吉益耳童没(慶応3・9・10金沢生、名鉄而五郎)。 京都洋面の黎明期
6・26 西陣織物工業組合、西陣織物統制組合に改組。 西陣織物館記		▷ 表具師 10代奥村吉次郎没。 京都の美術工芸100年展目録
6・一 第4回華叡会展開催。 太田喜二郎遺作展図集		▷ 菊池契月作品特別展、京都美術館に開催。 菊池契月遺作展画集
6・一 国画会工芸部京都在住者小品展、南禅寺畔無隣庵に開催(福田力三郎、徳力孫三郎、鈴木清、山田祐、稲垣稔次郎、賛助出品者:富本憲吉)。 京都 6・7、稲垣稔次郎作品集		▷ 戦時物資統制により西陣機業は、休業状態(婦人はモンペ、男子は詰襟服にゲートル巻が日常の服装であるのも原因。要技術保存織物と戦時生活必需品をほそぼそと製造するのみ)。 西陣織物館記
7・1 京都から西山翠嶂、堂本印象、上村松園、帝室技芸員となる。 museum 202、官報		
7・1~23 平安神宮御鎮座50年平安遷都1150年奉祝京都市美術展、京都美術館に開催(出品点数は日本画172点・洋画262点・彫刻30点・工芸105点、審査員:日本画:橋本関雪・堂本印象・上村松園ら、洋画:太田喜二郎・黒田重太郎・須田国太郎ら、彫塑:矢野判三・松田尚之、工芸:楠部弥弑・山鹿清華・清水六兵衛ら。市展はこれで終る)。 日本美術年鑑 昭19-21、市美術館と美術品		
7・4 警報発令と同時に開催中の市展は休館する。 京都 7・5		

参	考	日	本
(1)戦時特別美術展出品(京都関係のみ)		1・一	宮本三郎の戦争記録画「海軍落下傘部隊メナド奇襲」、昭和18年度朝日文化賞を受ける。
洋画		1・一	日本美術および工芸統制協会、伝統工芸部を新設し、美術工芸の国家公用性を強調、古代工芸の復原を行う。
黒田重太郎「古都の朝」、須田国太郎「河内金剛山」、伊谷賢蔵「激怒闘魂南海を睨む」、大橋孝吉「上嵯峨の秋」など		2・1~29	芸術院会員による戦艦献納作品展、表慶館に開催。1人5点。
工芸		4・28	洋画家 松岡寿没(文久2生、享年83)。
清水六兵衛「国華花瓶」、清水正太郎「躍動」、楠部弥弑「神国花瓶」、伊東陶山「春曉陶呂」、河合栄之助「磁器柿花瓶」、山鹿清華・岸本景春・皆川月華ら		5・一	池上秀敏(享年71)、森田勝(享年41)没。
日本画		7・1	西山翠嶂、堂本印象、鍋木清方ら帝室技芸員となる。
小野竹喬「太平洋」		7・一	野口謙蔵没(享年44)。
彫塑		9・11	日本画家 荒木十畝没(明5生、享年73)。
矢野判三、大西三四郎ら	日本芸術院史、京都 12・18	9・28	情報局、美術展覧会取扱要綱発表(公募展禁止など。二科展、一水会展、新制作派展など中止、10・6 二科会解散、以後旺玄社、構造社、日本彫刻家協会、日本木彫家協会、新構造社なども解散)。
		10・一	泉二勝麿(享年63)、長谷川栄作(享年55)、熊岡美彦(享年56)、島崎鷗二(享年38)ら没。
		11・25~12・25	文部省戦時特別美術展、都美術館に開催(情報局、陸海軍省協賛)、(安田靉彦「12月8日の山本元帥」など)。
		12・一	小川秀峰没(享年47)。

京 都 府	参 考	日 本
<p>2・26 日本画家 橋本関雪没(明16・11・10神戸生、名関一、享年63)。 日本美術年鑑 昭19-21、日本芸術院史</p> <p>2・26～3・11 戦時特別文展(京都作品のみ京都美術館に開催)。 市美術館と美術品</p> <p>2・一 上村松園、奈良県平城に移住。 松園作品集</p> <p>4・10 京都画壇の作家30余人、舞鶴海軍軍需部の指定により、海軍軍需美術研究所を設置、発会式を洛西の某国民学校に挙行。 日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>4・13 海軍軍需美術研究所開所式を挙行(福田平八郎が指導主任となる)。 日出 4・11</p> <p>9・15～10・30 現代美術作品展、戦時中風船爆弾の工場となっていた京都美術館に開催(戦時中美術に飢えていた市民に好評をもって迎えられ、従来の常設展には見られない盛況を呈する。15日には入浴した米軍将校も参観。出陳品は美術館所蔵の日本画・洋画・美術工芸・彫塑等百数十点および須田国太郎滞欧中の名画模写作品、ロシア人ニコラスデーリッヒの小品集など)。 京都 9・16、市美術館と美術品</p> <p>9・22 日本美術及工芸協会(財)、第1回評議員の懇談会を今出川大宮の西陣織物組合に開催(東京から児玉理事長、国井・中村・能勢各理事を迎え、京都側は理事金島桂華を始め、第1部堂本印象・山口華楊・中村大三郎ら、第2部黒田重太郎・須田国太郎・太田喜二郎、第3部松田尚之、大西三四郎、第4部山鹿清華・岸本景春が参加。今後における美術工芸界の進むべき道について、理事長の説明と各評議員による論議が行なわれ、同懇談会において、京都美術及工芸指導所を設ける等美術都市京都として世界的に進出すべき重要議案その他を決議する)。 京都 9・26</p> <p>9・一 京都陶磁器工業統制組合、4月から9月までに、戦災者用陶磁器・府民の日常生活必需品のフタ付ドンブリ・湯飲み・鍋など約25万個の陶磁器並びに15万個のコンロを製造することになり、約3分の1製造を完了。 京都 9・18</p> <p>10・10 日本美術工芸交驩協会発会式、円山左阿弥に挙行(新日本の世界進出の道を美術文化に求めて、染織の小合友之助・陶芸の河村喜太郎・漆器の番浦省吾・版画および風俗研究家、吉川親方・京大教授木村素衛・思想家富島綱男・実業家安井善七らが設立したもの、同協会は陶磁器・漆器・染織繻・人形・版画および木竹・硝子製品の作家並びに研究会を組織し、優秀な作品の製作によって平和親善に尽くすのが目的。嵯峨小倉山に</p>	<p>窯業場・研究所・陳列所を設けるとともに適時作品展覧会を開催、その他美術文化に関する講演・出版等も行なう)。 京都 10・11</p> <p>11・21～12・10 第1回京都市主催美術展⁽¹⁾[第1回京展]、京都美術館に開催(同展は、これまでの市展を改組し全国から作品を集めた戦後はじめでの公募展。出品作の全体的傾向としては、戦時中の重苦しい空気を一掃して明朗な気分があふれ、武者絵は一点もなく女性と子供を扱ったものや花鳥・風景が多く、従来よく取材されたタカ・ワシ等の猛きん類も見られない。美術愛好家や進駐軍将兵なども来観しにぎわす。応募総数776点)。 市美術館と美術品、京都画壇</p> <p>11・一 京都行動美術協会結成。 市美術館調書</p> <p>12・11 日本美術及工芸協会京都府支部、工芸指導所を上京区元誓願寺知恵光院渡辺洋行ビル内に設置。この日開所式を挙行。 京都 12・4、日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>12・25 洋画家 秦テルヲ、大阪で没(明20京都生、名輝男、享年58)。 ☆</p> <p>この年</p> <p>▷ 洋画家 中林懋没(明11京都生)。 京都洋画の黎明期</p> <p>▷ 漆工家 奥村究果没(明31富山県生)。 京都の美術工芸100年展目録</p> <p>▷ 京都市立絵画専門学校、京都市立美術専門学校と改称(洋画・彫塑・工芸の3科を加える)。 京都画壇</p> <p>▷ 犬丸教化課長、文部省と東京の会員だけで決定した日展の発足に不満の京都画壇を説得するため入浴。 同上</p> <p>▷ 京都日本画家協会、日展を5月に延期してほしいとの陳情書を文部省に提出(予算を年度内に使われなければならないという役所の都合による3月日展に反発する同協合では、特選以上の作家が連署、審査員に決められた菊池契月・西山翠嶂・上村松園の3芸術院会員の承認の下に陳情書を提出する)。 同上</p>	<p>1・一 林倭衛没(享年51)。</p> <p>3・1 小室翠雲没(享年72)。</p> <p>5・17 美術史家 滝精一没(明7生、享年73、『国華』を主宰。『文人画概論』など)。</p> <p>5・25 洋画家・漫画家 柳瀬正夢没(明33生、享年46)。</p> <p>5・25 彫刻家 安藤照没(明25生、享年54、戦災死)。</p> <p>7・1 東京美術学校教授 田中喜作、山梨県で没(明18京都生、享年61)。 美術研究 240</p> <p>8・15 大東亜戦争終結。</p> <p>8・15 この日までの戦災による文化財被害、名古屋城、徳川家康廟など国宝293件、史蹟名勝天然記念物44件、重要美術品134件(昭21・7・1文部省発表)。</p> <p>10・4 大日本美術報告会解散、昭26・8・23日本美術及び工芸統制協会解散。</p> <p>10・20～10・31 第17回青竜展、三越に開催。(戦後初の国体展、電子「爆弾散華」など)。</p> <p>10・一 東郷青児、渡辺義和、高岡徳太郎らが中心となって二科会再建。</p> <p>11・一 行動美術協会結成(旧二科会の向井潤吉、小出卓二、伊谷賢蔵、柏原覚太郎、榎倉省吾、田中忠雄、高井貞二ら)。昭21・9・22～10・4第1回展。</p> <p>12・一 日本書道美術院結成(会長：尾上柴舟、副会長：豊道春海・磯野学申)。昭21・7再建書道展。</p>